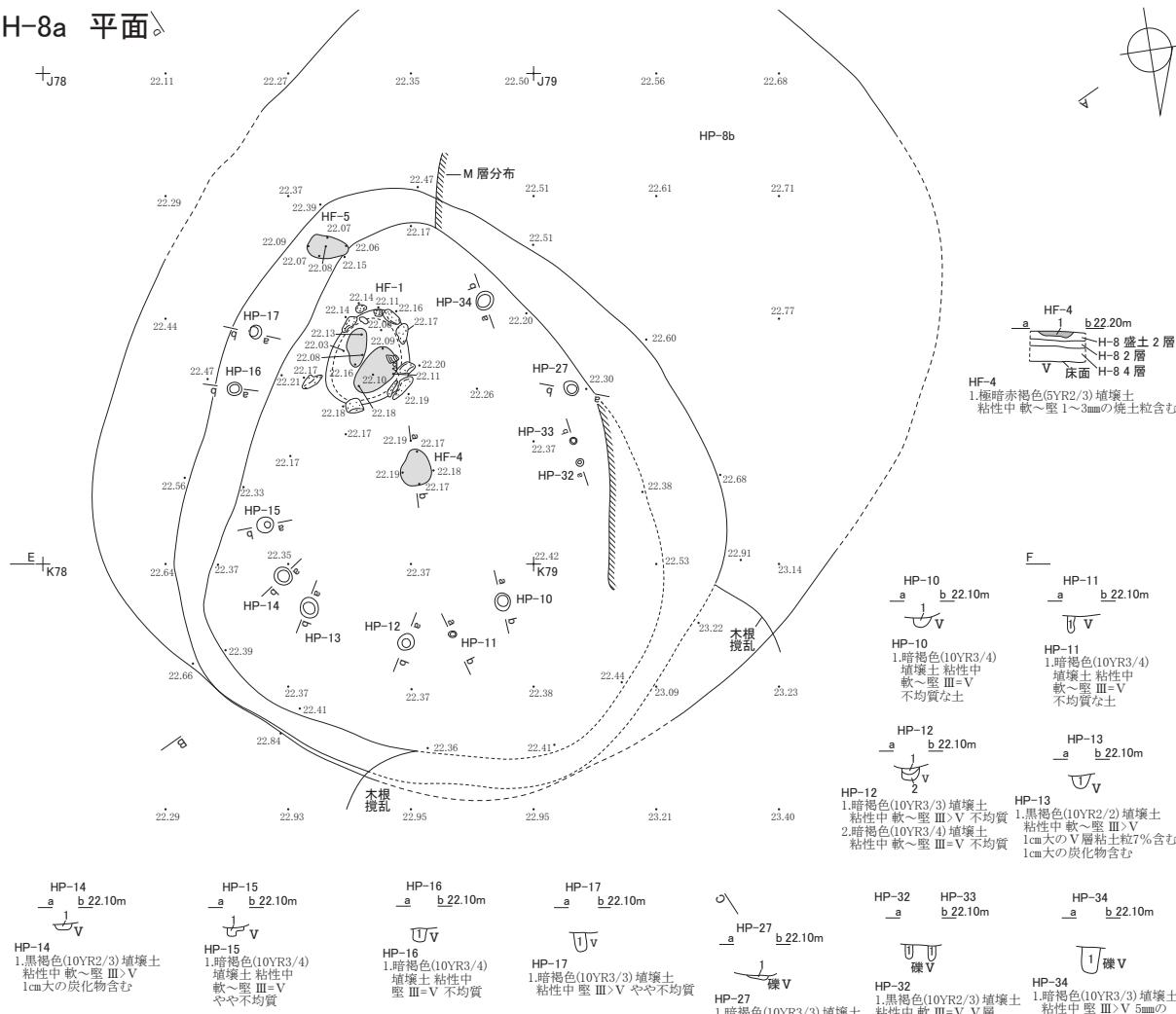
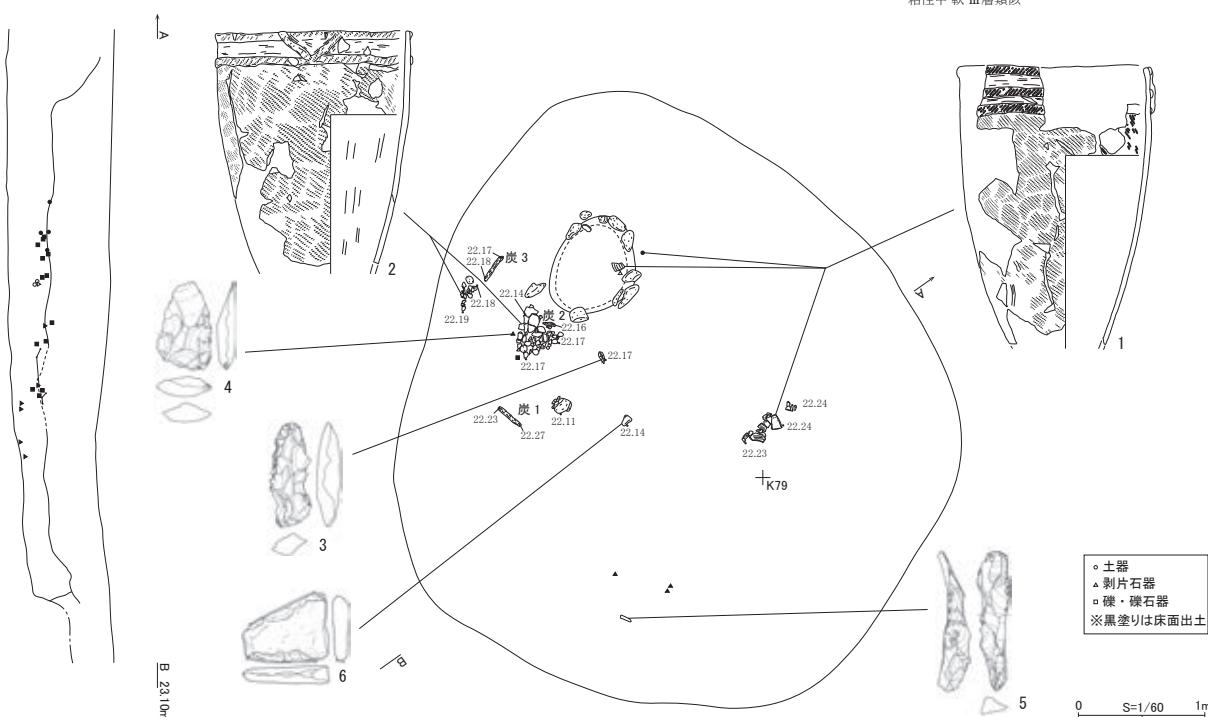


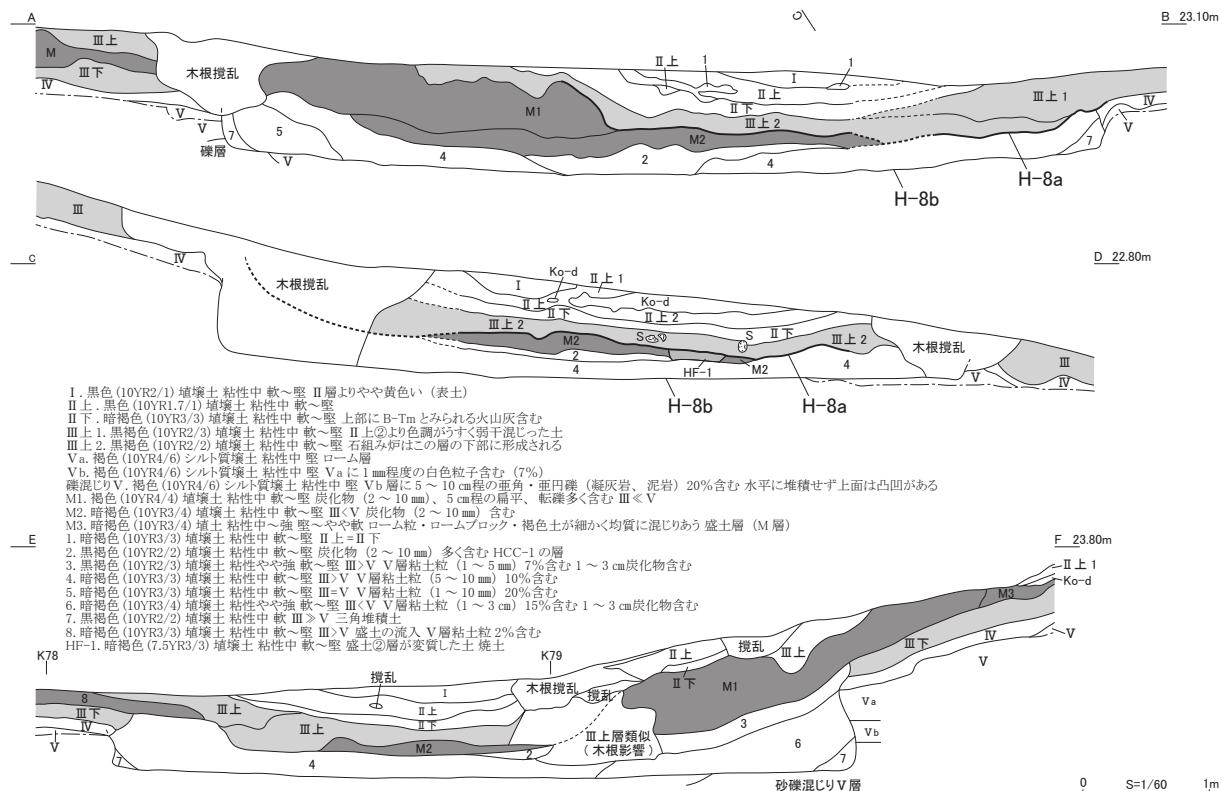
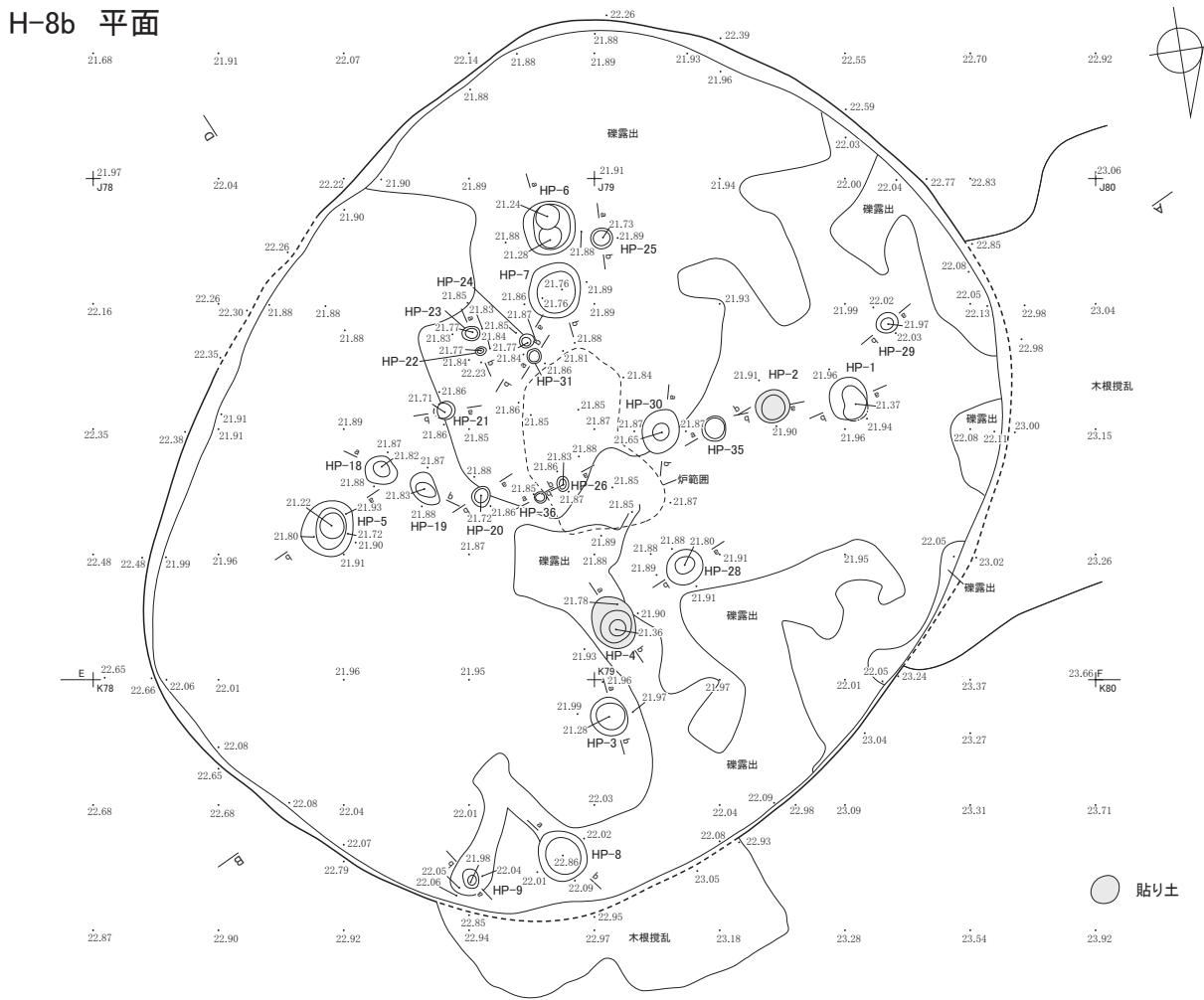
H-8a 平面図



H-8a 遺物分布【床面・覆土】



H-8b 平面



図VI-66 竪穴住居跡(65) H-8a・b(2)

H-8b HP-1~9・18~36 断面



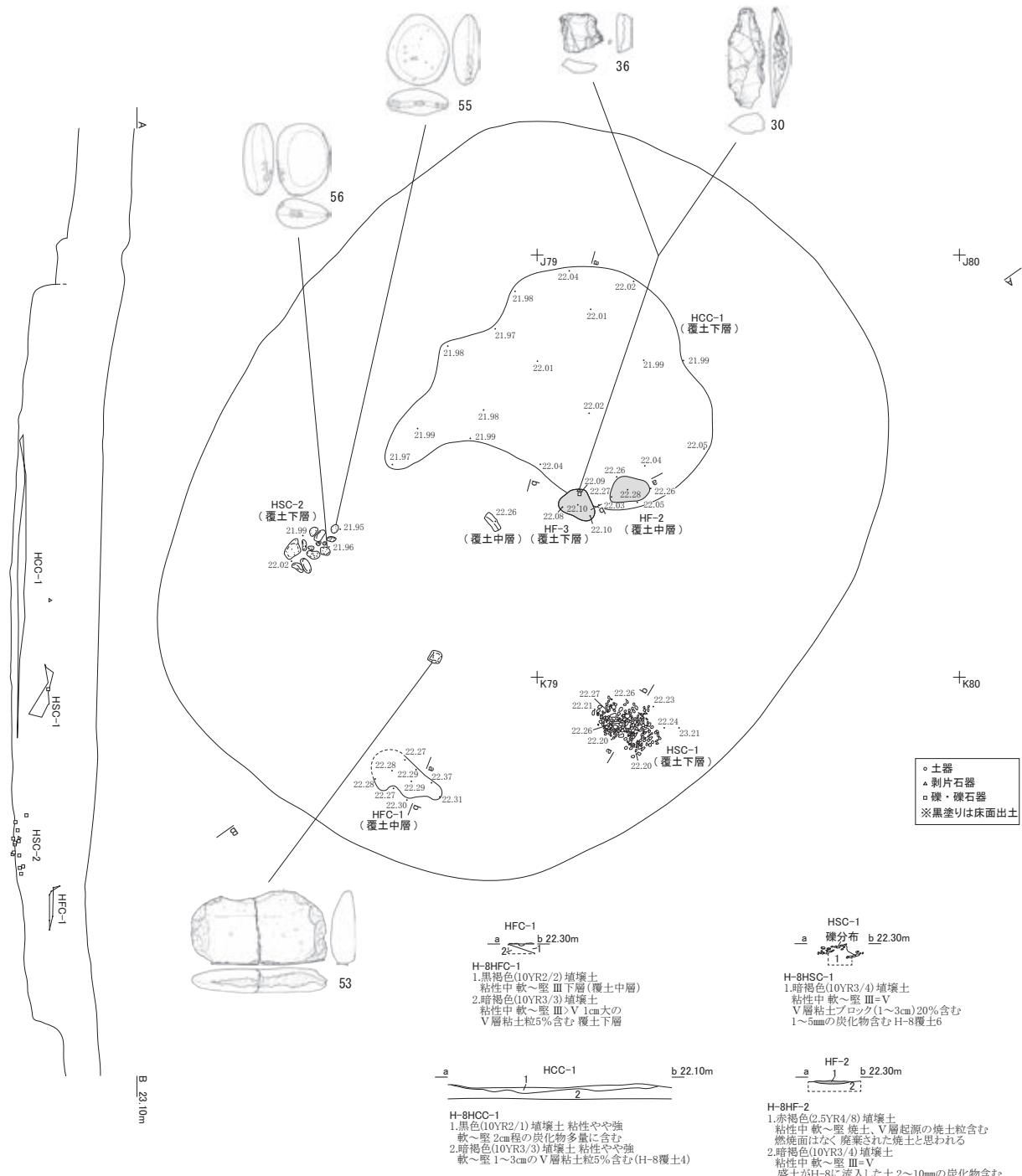
図VI-67 竪穴住居跡 (66) H-8a・b(3)

面はミガキにより光沢がある。25は詳細時期不明である。

26はIII群b類。底部からほぼ直線的に立ち上がる器形で、3か所の小突起がある口縁部は幅1cmほど無文で、胴部にはLR縄文が縦回転で施文される。27はIV群a類の胴部片。単軸絡条体5類が施される。石器：3～6はH-8a床面出土。3は粗い剥離のみの両面調整石器。4は籠状石器。横長剥片素材で、素材縁辺が一部残存する。5はRフレイク。稜付き石刀状の素材で、一部加工が施される。6は扁平打製石器VI類。

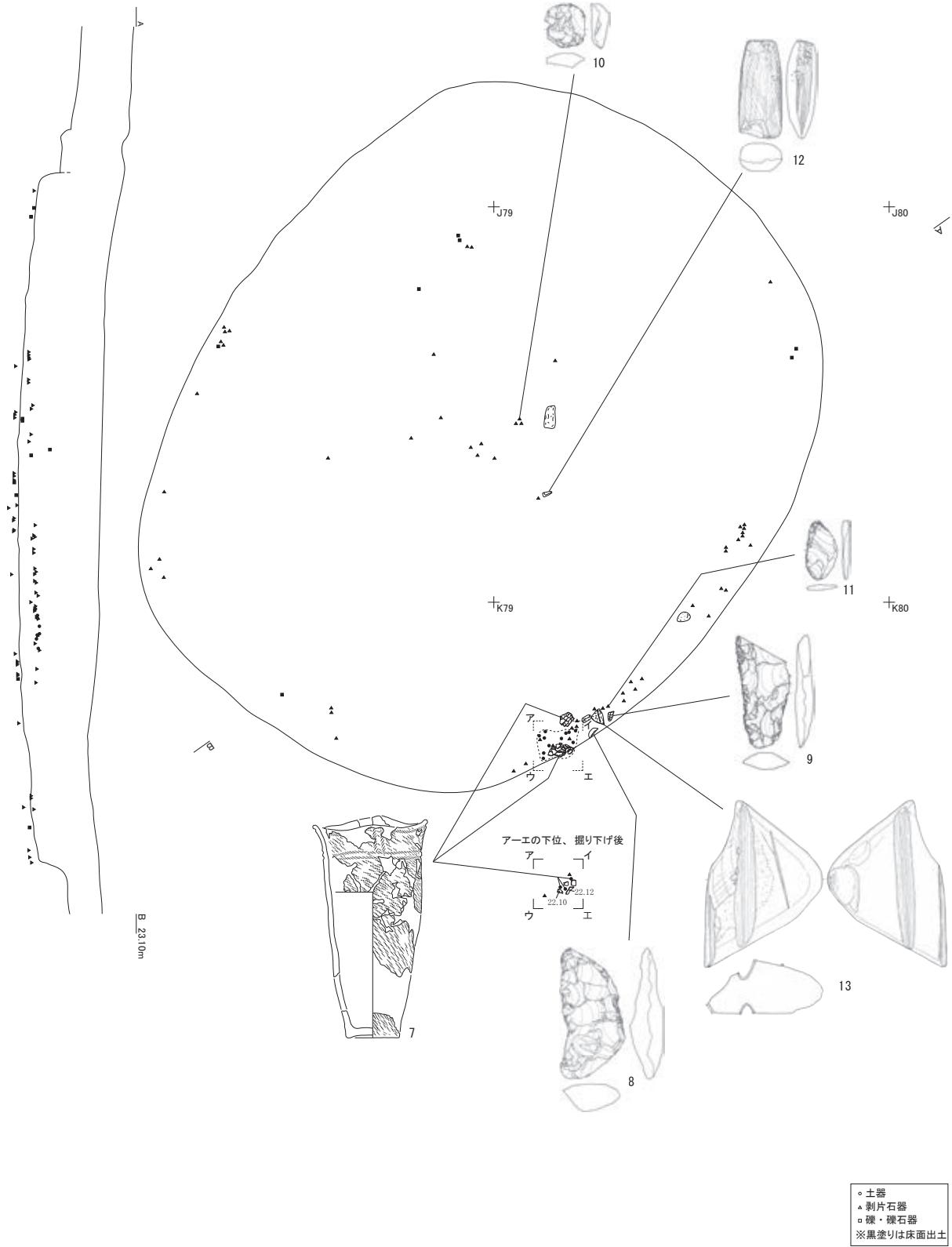
8～13はH-8b床面出土。8～10は両面調整石器。8は半月形で、平坦剥離が施される。9は薄手で大型の折損品。右側縁裏面上部に折損後の再加工痕がある。10は円形の小型品。11は薄手の素材のスクレイパーII類。12は石斧。側縁に擦り切り痕があり、表面は全面研磨により整形される。基部には素材の分割面がそのまま残り、刃部には刃こぼれの剥離がある。基部側の四面には敲打痕があるが、その窪みは整形痕とは異なり、先鋒で、たたき石として代用されたとみられる。13は擦切残片。厚さ6cmほどの扁平な原石素材で、長さは20cmを超えるサイズであったと推定される。中央と左側面の両面縦位に深さ最大2.5cm超の溝がある。左側縁は上下の溝に沿って切断されるが、中央溝は上下の溝に沿って破断が試みられるものの、裏面の溝に沿わずに器体中央で剥離される。正面の溝には打点があり、楔状の石製の道具を挿入して分割を試みたが裏面の溝に届かず、また直線的にも割れずに失敗したものとみられる。このほか、正面右側に浅い溝があり、原石から分割する際にあらかじめ割り付けをした痕跡の可能性がある。溝の最深部の間隔は3～4cmで、幅より厚みのほうがあり、切断された素材を横方向に用いたと考えられる。

H-8b 遺物分布【覆土中・下層】

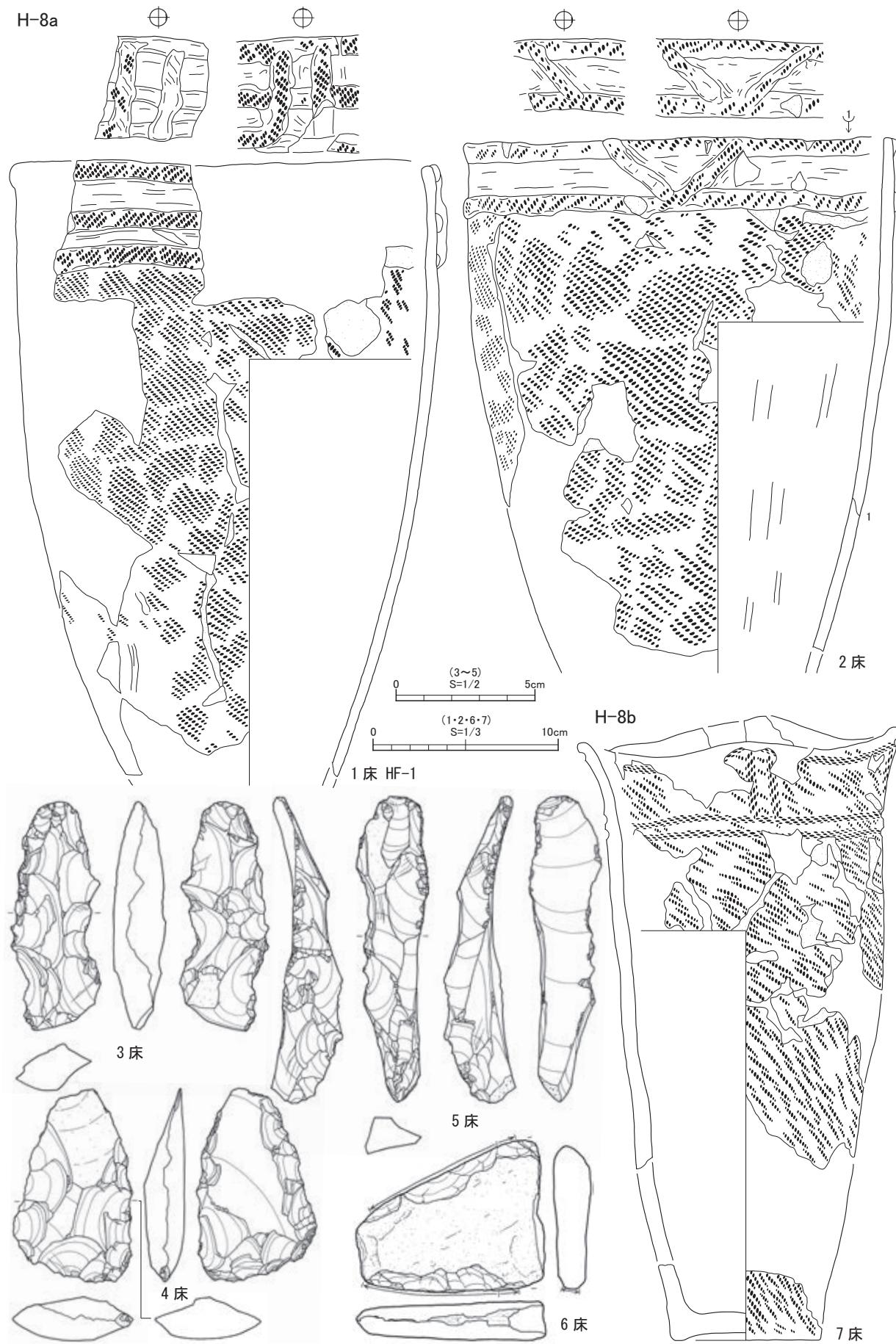


図VI-68 墓穴住居跡(67) H-8a・b(4)

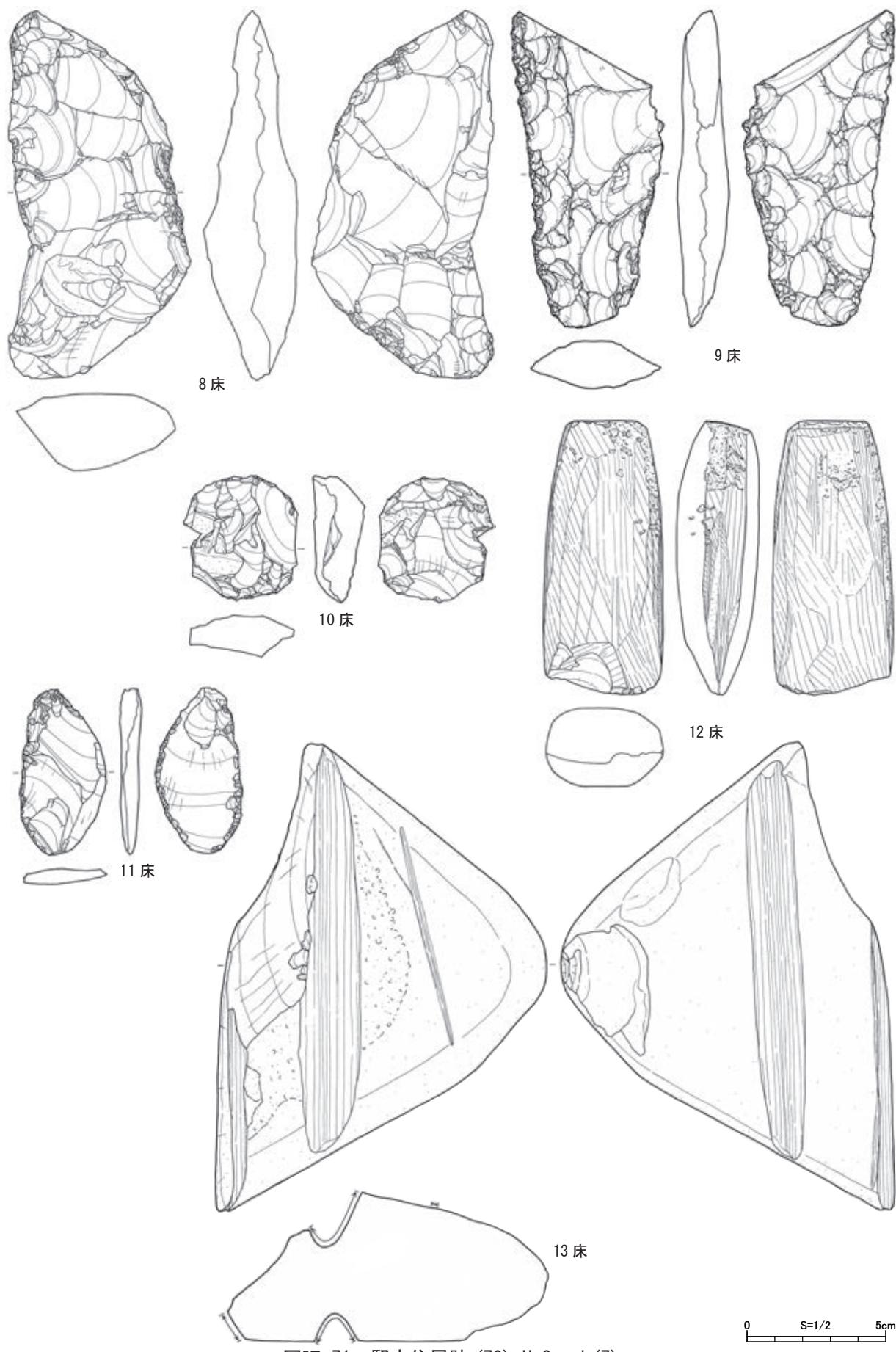
H-8b 遺物分布【床面】



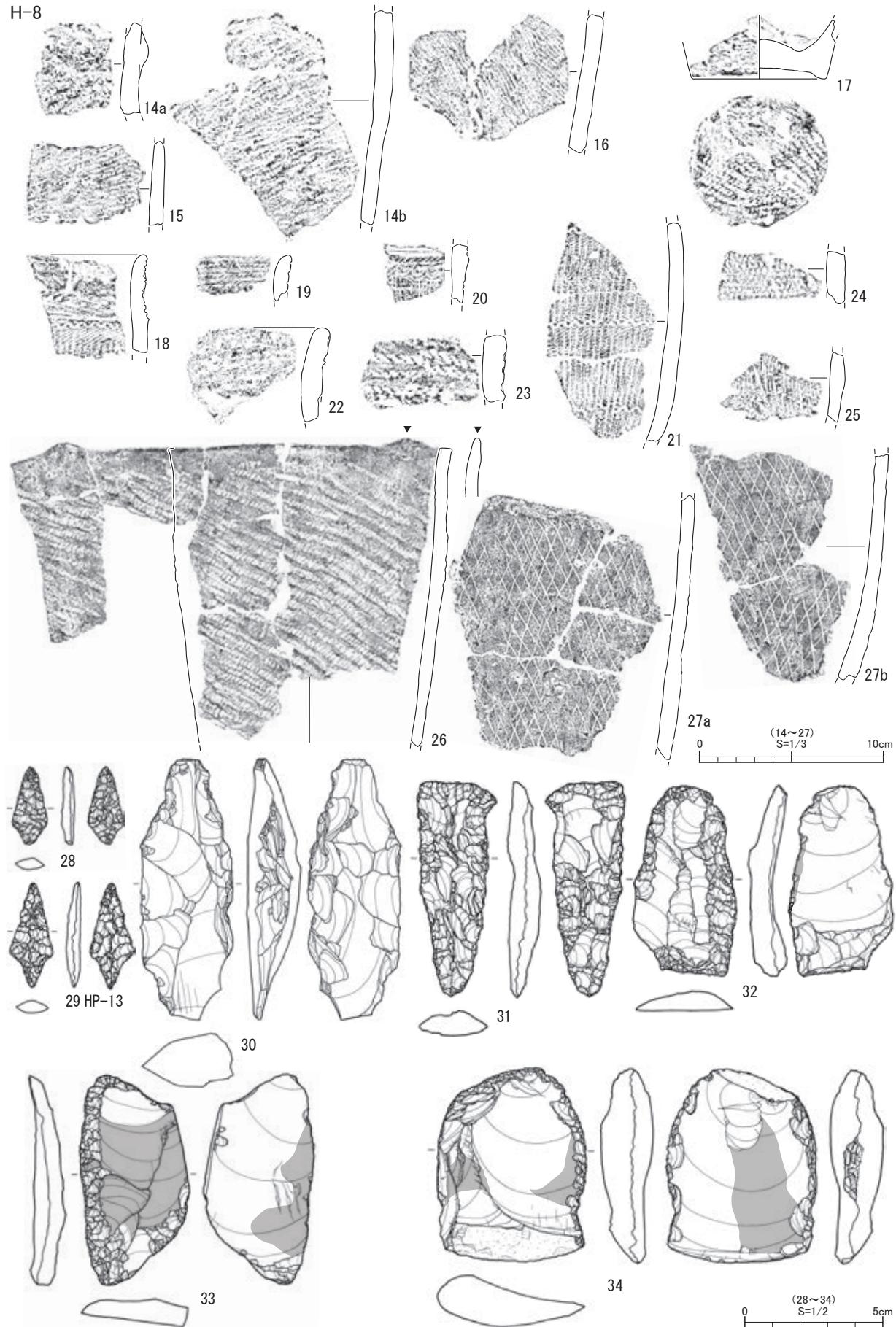
図VI-69 壇穴住居跡 (68) H-8a・b(5)



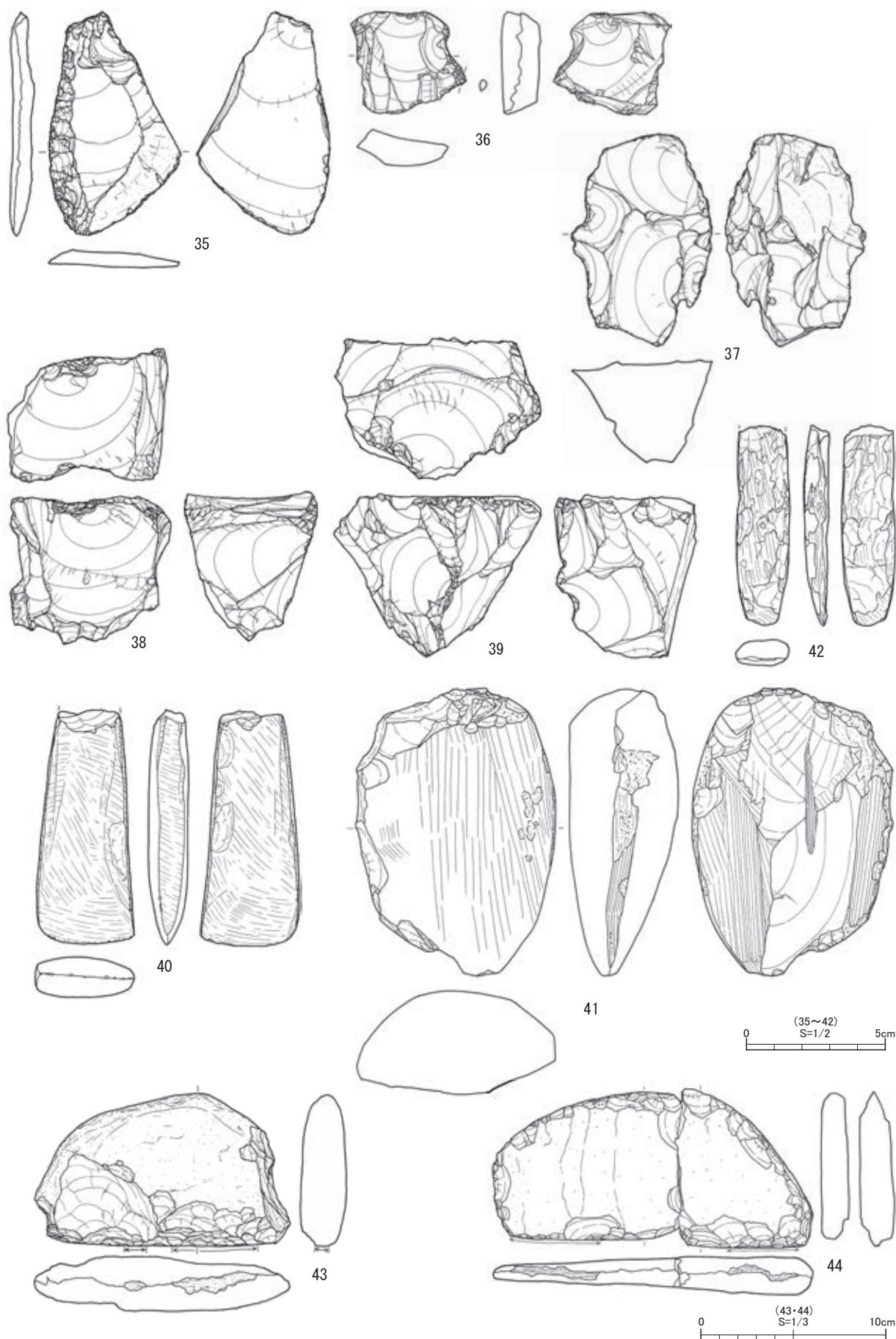
図VI-70 竪穴住居跡(69) H-8a・b(6)



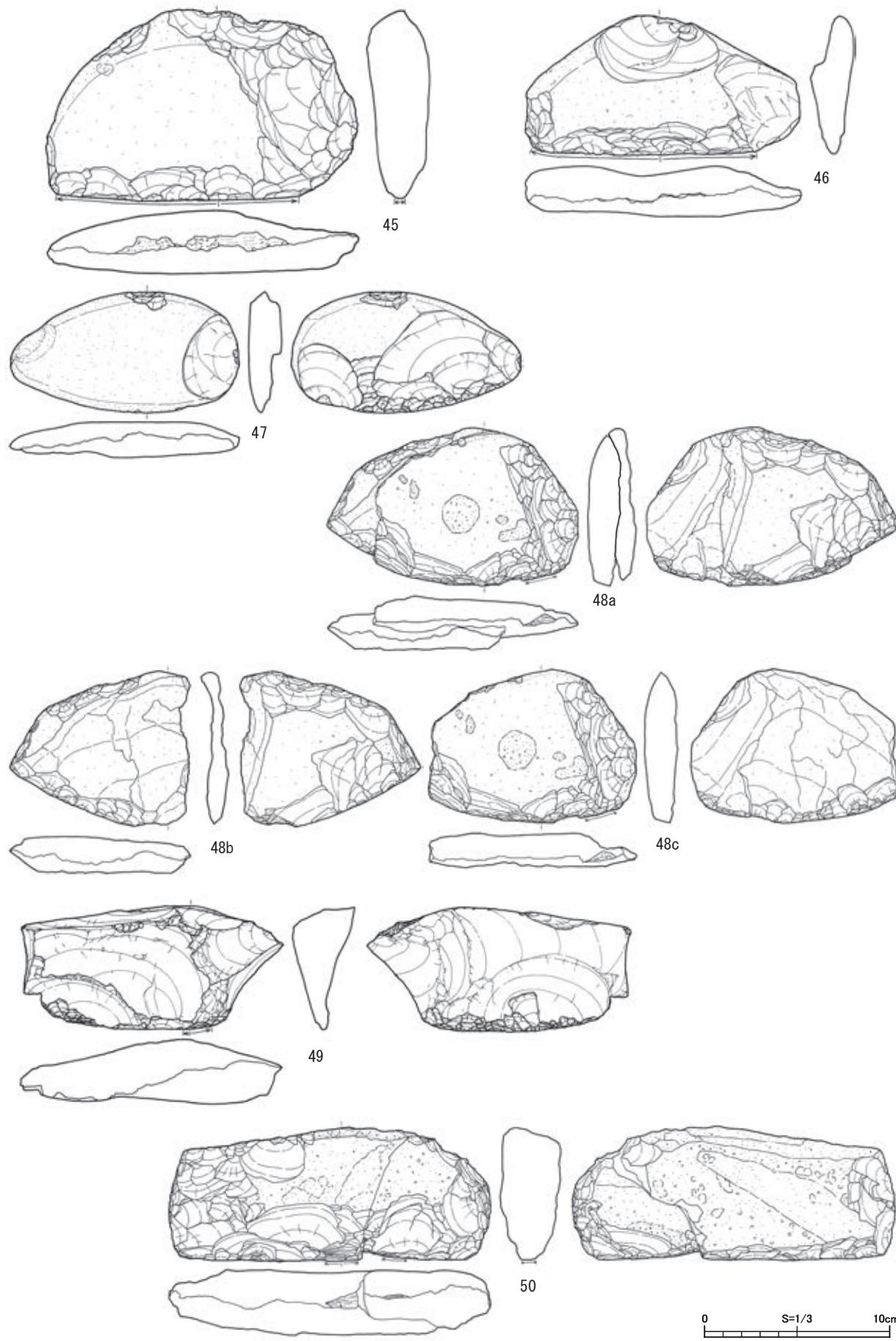
図VI-71 積穴住居跡(70) H-8a・b(7)



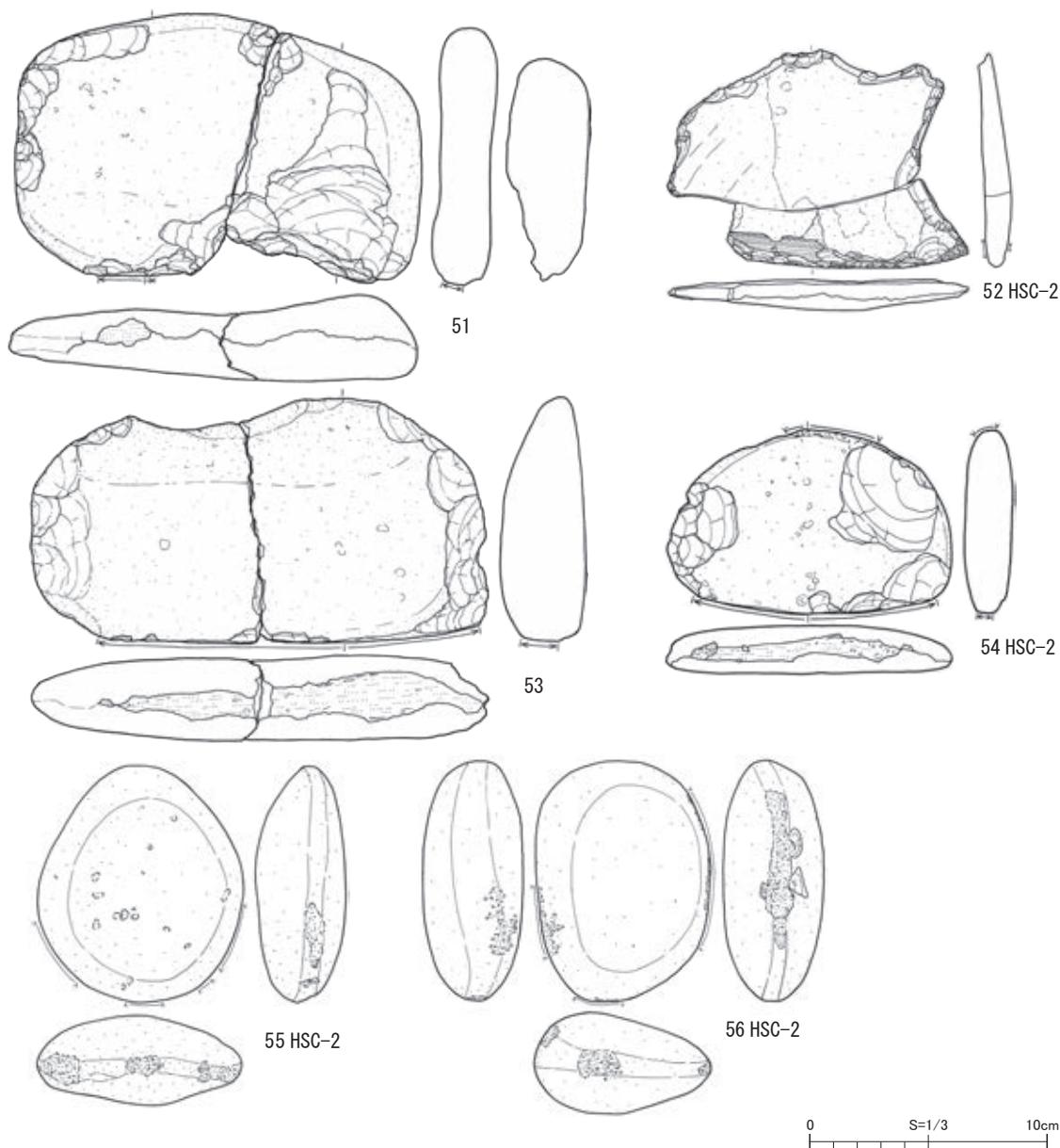
図VI-72 竪穴住居跡(71) H-8a・b(8)



図VI-73 竪穴住居跡 (72) H-8a · b (9)



図VI-74 竪穴住居跡 (73) H-8a・b(10)



図VI-75 竪穴住居跡 (74) H-8a・b(11)

28～56はH-8a・b覆土出土。28・29は石鏃IIa類。30・31は両面調整石器。30は横長剥片素材、31は上部が籠状である。縁辺は押圧剥離によって鋸歯状である。32～35はスクレイパー。32・33はIb類、34はIV類、35はVI類である。32は末端部の肥厚部が横方向の剥離で除去される。34は左側縁が潰れ、腹面は中央寄りに鈍い光沢が帯状に分布する。36は石錐で、短寸の剥片の一端に短い突出部が作られる。37～39は石核。37はIIa類、38・39はV類。40は石斧。全面研磨により整形される。41は石斧未成品。擦り切り技法による素材に研磨と敲打が施されるが、限定的で素材形状からほぼ変化がない。42は片岩製の石のみ。末端部のみ研磨されて刃部が形成される。43～52は扁平打製石器。43～45はI類、46はII類、47・48はIII類、49・50はIV類、51はV類、52はVI類である。44は右側の破片の折損後、再利用によって下縁部が後退している。48aは平面的に分割するように剥落した後、48b・cとも下縁部が再加工されている。49は泥岩の大型剥片素材で、直線的な鋭利な縁辺に刃部が形成される。50は折損後、小型の破片の刃部が後退し、再利用されたとみられる。51は中央右側の打撃により大きく破損している。52は石鋸の刃部が剥離により、扁平打製石器の刃部と

して転用される。53・54はI a類のすり石。55・56はI c類のたたき石。

(鈴木)

豊穴住居跡9(H-9) (図VI-76~86、表VI-2、図版59~63)

確認・調査: 調査区西側の標高27.5m付近の高位部に位置する。メインセクション0ラインのトレーナー調査およびH-1南西壁で、RM層下位にIII下層から掘り込まれたH-9の豊穴断面を確認したため、H-1調査終了後に調査を開始した。当初は遺構範囲が不明確であったため、便宜的にNライン(A-B)と、直交する任意のライン(C-D)に土層観察用のベルトを設定した。上部からIII層、RM層を慎重に掘削し、遺構輪郭の検出に努めたところ、遺構の南側でIII・IV層が広く削平され、V層上に直接RM層が堆積する状況を確認した。このため遺構構築が削平以前か以後のどちらの面で行われたかが問題となつたが、明確な判断はできなかった。III下~V層の削平面上面で、明黄褐色から褐色土が円形に落ち込む遺構の輪郭を確認し、1~7層の覆土掘削に移行した。床面直上土である覆土下部の4層からはII群b類の個体土器、剥片集中、石皿などの多量の遺物が出土した。床面と壁を検出して遺構の全体形状を確認し、土層断面を記録した後にベルトを除去した。床面精査により柱穴、貼り床、砂ピットなどを検出し、個別に調査・記録した。豊穴住居跡の平面形は円形、大きさは6.9m、長軸は主柱穴配置と住居中央の貼り床の長軸を基準とすれば南西-北東方向である。豊穴の深さは構築面が削平を受けている可能性があるため判別できない。

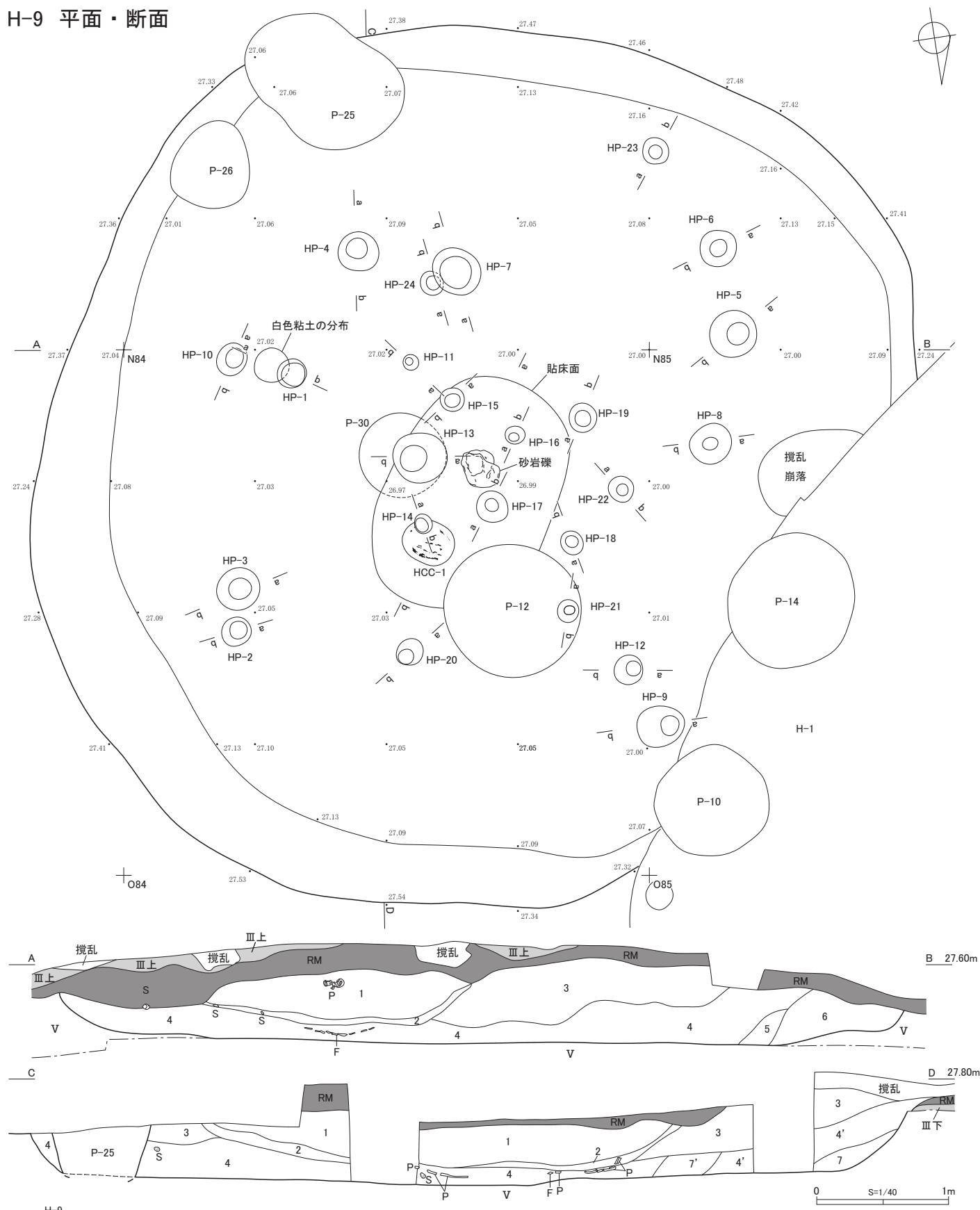
土層: 覆土は大きく上・中・下に分けられ、上部は自然堆積層のIII上層、中部はRM層、下部は近隣遺構からの掘り上げ土とみられる1・3・4層、流入土とみられる2・5・7・7'層、屋根土や盛土などの崩落とみられる6層で構成される。RM層はH-1掘り上げ土が主体と考えられる。1層は白色で粘性が強く岩片を含有するなど特徴的な土で、厚さ30cmを超える堆積が認められたが、基本土層中に給源となる層は認められなかった。或いはV層より下位に堆積する土の可能性もあるためH-1の掘り上げ土とも考えられる。2層は薄い面的な堆積のため自然流入と理解したが、土質は1層に類似し、豊穴周囲にあった掘り上げ土が流れ込んだもの可能性がある。4層は床面全体を広く厚く覆うため、屋根土が崩落した可能性を考えたが、遺物を多く包含することから、豊穴窓への遺物の廃棄と共に近隣遺構から掘り上げ土を投げ込んだものと理解した。その過程で流入などの自然堆積が介在したこととも考えられる。遺物取り上げ層位は、1~3層が覆土1、4層が覆土2、5~7層が覆土3で、覆土1・2からは6,905点(土器1,010点、石器ほか5,895点)の多量の遺物が出土した。

全体の堆積過程を復元すると、①豊穴を構築し掘り上げ土を屋根土などに利用する、②住居廃絶後に屋根土などが崩落、③若干の流入土の堆積を挟んで近隣遺構から掘り上げ土や遺物が投げ込まれる、④H-1掘り上げ土が周堤盛土を形成しH-9上位を広く覆う、の推移が考えられる。

床面・壁: 床面は全体として概ね水平に構築されるが、中央部が若干低い。東西壁付近(A-Bライン)では床が若干高くなる様子がみられ、東側では段状に近い。また北側の床は南側に比べ5cm程高く構築されていた。また中央部には長軸1.85×短軸1.3mの橢円形を呈する貼り床がみられた。貼り床の厚さは5cm程である。壁の立ち上がりは西側で急角度、東から北ではやや緩斜に認められる。北西側の壁・床がH-1に切られ消失している。

付属遺構: 付属遺構には主柱穴、その他柱穴、砂ピット、炭化物集中がある。主柱穴は9基(HP-1~5・9・10・12・13)で、規模は径25~35cm、深さ50~80cmが主体で、概ね円筒状で床面と垂直に掘り込まれている。配置は6単位に分けられ、この内HP-2・3、HP-4、HP-5、HP-9・12の4単位が一辺約3mの正方形に配置されている。2基が近接するものは建て替えや補助柱の可能性が示唆される。またHP-1・10・13は中央軸上を通り、HP-13は豊穴のほぼ中央に位置する。中央に主柱穴を配置する構造はH-1・6・25でも確認されている。その他柱穴では、径30cm前後・深さ15cm未満の浅い柱穴HP-6

H-9 平面・断面



H-9
 1. 明黄褐色(10YR6/6)砂壤土 粘性弱 すこぶる堅 白色砂質シルトに岩片30%以上含有
 2. 褐色(10YR4/4)埴土 粘性強 堅ローム主体土に白色砂質粘土がブロック状に混じる
 3. 褐色(10YR4/6)埴土 粘性中～強 すこぶる堅 炭化物粒散在 比較的均質なローム主体土層
 4. にふい黄褐色(10YR4/3)埴土 粘性中～強 堅ローム主体土
 4'. にふい黄褐色(10YR4/3)埴土 粘性中～強 すこぶる堅 ロームブロック若干 4'に類似

5. 褐色(10YR4/6)埴土 粘性中 やや軟 ロームブロックと褐色土が斑状に混じるボソボソの土
 6. 褐色(10YR4/6)埴土 粘性中～強 不明 均質なローム主体土
 7. 暗褐色(10YR3/3)埴土 粘性中～強 すこぶる堅 三角堆積土 流入土
 7'. 暗褐色(10YR3/4)埴土 粘性中～強 すこぶる堅 ロームブロック若干 流入土とみられる

図VI-76 積穴住居跡 (75) H-9(1)

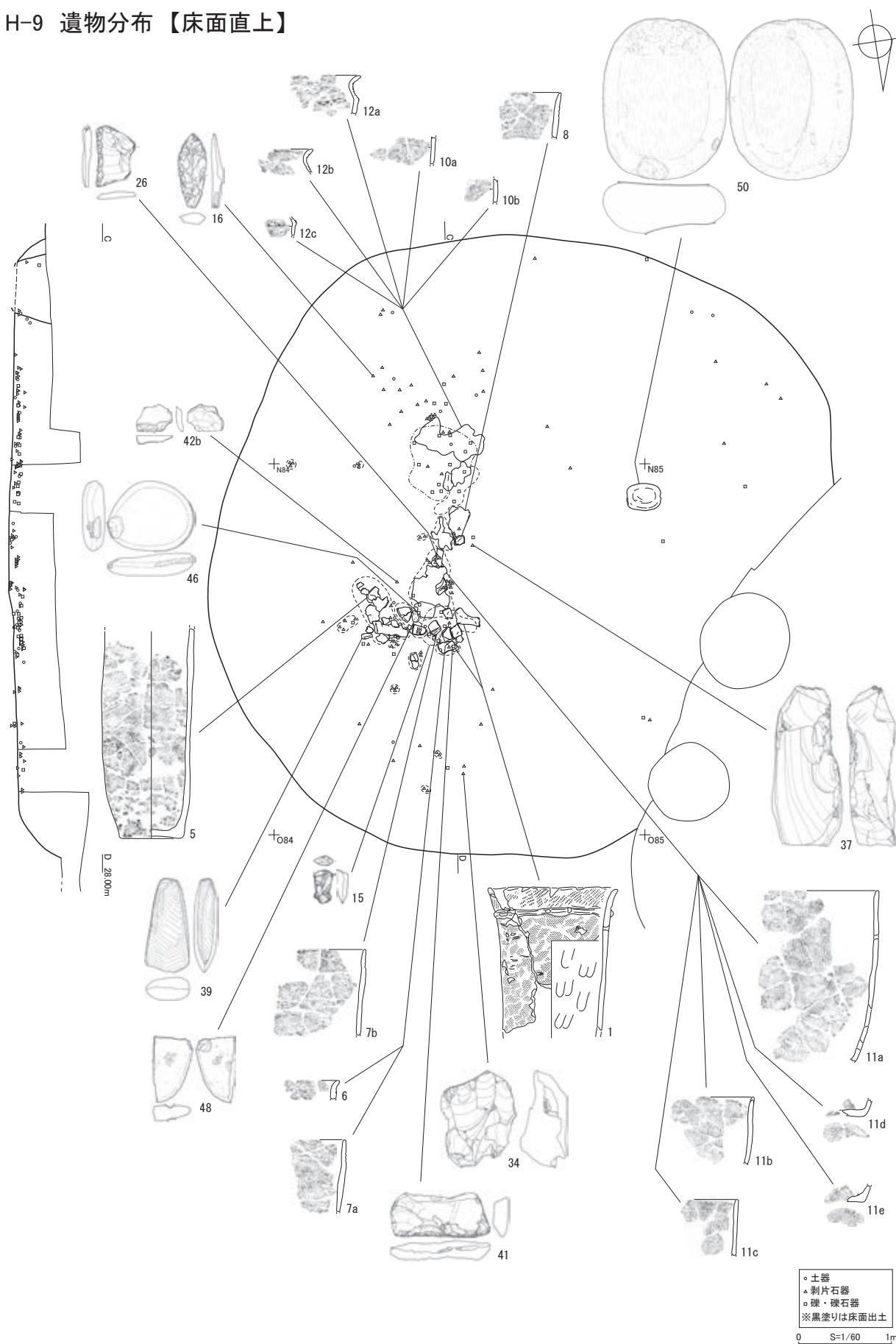
H-9 断面図 HP-1 ~ 24 貼床断面



図VI-77 壁穴住居跡(76) H-9(2)

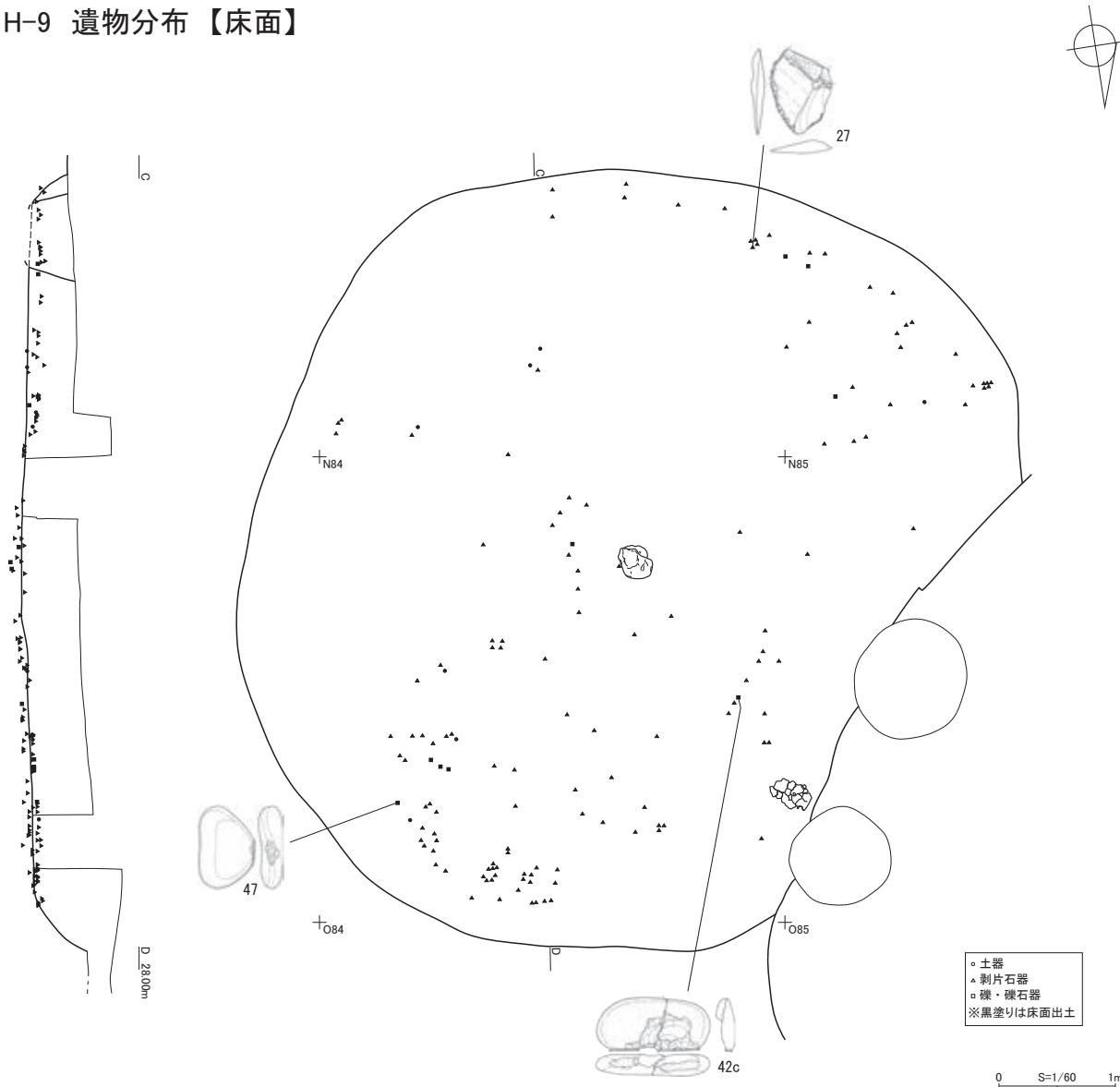
0 S=1/40 1m

H-9 遺物分布【床面直上】



図VI-78 壇穴住居跡 (77) H-9 (3)

H-9 遺物分布【床面】



図VI-79 壇穴住居跡(78) H-9(4)

～8があり、南西側に配置がみられる。主柱穴HP-4・5に関連して機能したものかもしれない。このほか、径20cm未満の小柱穴6基(HP-11・20～24)が、主に主柱穴で区画された内部に構築されており、後述の砂ピットを囲むように配置されている。

砂ピットは壇穴中央部の貼り床周辺でまとまって検出された。HP-14～19の6基で、規模は径20cm未満・深さ20cm以下が主体である。配置は整然とみられ、同範囲には炭化物集中HCC-1や砂岩礫などもまとまっている。断面観察で認められた砂の堆積は、①底面から砂が充填され開口部に黄褐色粘土が貼られたもの(HP-14・15・16・18)、②複数層のレンズ状堆積中に砂層が認められるもの(HP-17)、③底面から壁面に砂が貼られ中央に黄褐色粘土が入るもの(HP-19)、などバラエティがみられる。

炭化物集中はHCC-1の1基で、4～5cmの大粒の炭化木片が厚さ5cmほどの炭化物層に密に検出された。位置は貼り床の長軸上の北東側にみられ、対置する南西側にはHCC-1から50cmの距離で扁平砂岩礫が貼り床に数cmほど埋め込まれて配置されていた。

遺物出土状況：出土遺物の総数は21,005点で、土器等が3,744点、石器等が17,261点である。土器等はⅡ群b類3,738点、Ⅲ群a類1点、焼成粘土塊5点が、石器等は石鏃2点、石槍6点、両面調整

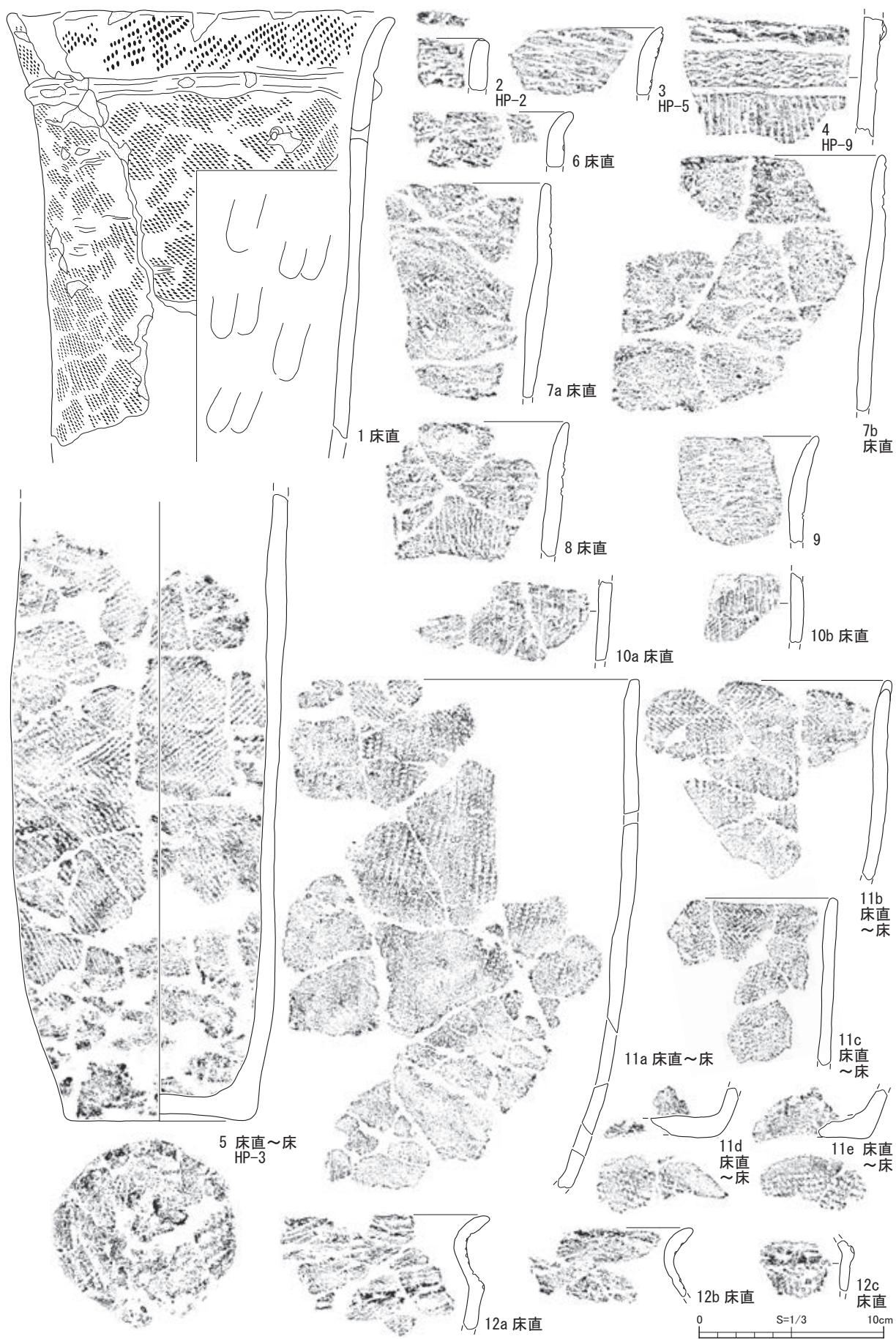
石器 9 点、つまみ付きナイフ 1 点、スクレイパー 14 点、楔形石器 1 点、R フレイク 15 点、U フレイク 2 点、剥片 16,803 点、石核 24 点、石斧 1 点、石のみ 1 点、扁平打製石器 6 点、すり石 1 点、石鋸 3 点、たたき石 3 点、砥石 2 点、台石 2 点、石皿 1 点、原石 6 点、加工痕のある礫 1 点、礫 356 点、石製品 1 点が出土した。覆土では床面直上の 4 層に II 群 b 類の個体土器、剥片集中、石皿など、まとまった遺物の出土状況がみられた。また床面からも II 群 b 類土器が多量に出土したほか、すり石、たたき石、台石の礫石器が確認された。

時期：床面出土土器は II 群 b 類のみがまとまって出土しており、覆土中の土器も 99.9% が II 群 b 類で占められる。床面検出の HCC-1 の燃焼材とみられる炭化材からは $4,810 \pm 30$ yrBP (K04-D15) の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層 b1 ~ c 式期と考えられる。
(坂本)

掲載出土遺物：(図 VI-80-1 ~ 図 VI-86-51、図版 188 ~ 191)

土器：1 ~ 12 は II 群 b 類。1 は円筒下層 b1 ~ b2 式。筒形で口縁部が外反する。断面三角形の隆帯で区画された口縁部には LR 斜行縄文、胴部には単軸絡条体 1 類が施文される。2 ~ 5 は円筒下層 b1 ~ c 式。3 は単軸絡条体 6 類、4 は口縁部区画帶である隆帯下位の 2 本の沈線間に不整綾絡文が施文される。5 は胴～底部で、上部は単軸絡条体 1 類が左下がり、下部は右下がり、中間の一部に多軸絡条体が右下がりに施文される。6 ~ 11 は円筒下層 c ~ d1 式。6 は絡条体圧痕、7a・b は表面風化により見えにくいが、縄線と結束第 1 種羽状縄文が見られる。8・9 は口縁部に L と R の縄線 2 本 1 組が押捺される。10a・b は結束第 2 種と自縄自巻 L が施文される。11a ~ d は、口縁部には結束第 1 種羽状縄文、胴部には単軸絡条体 1 類 LR が施文され、底面にも施文が見られる。12a ~ c は円筒下層 d2 式。口縁部が強く屈曲し、刺突と結束第 2 種で区画された口縁部には縄線による菱形文が描かれる。

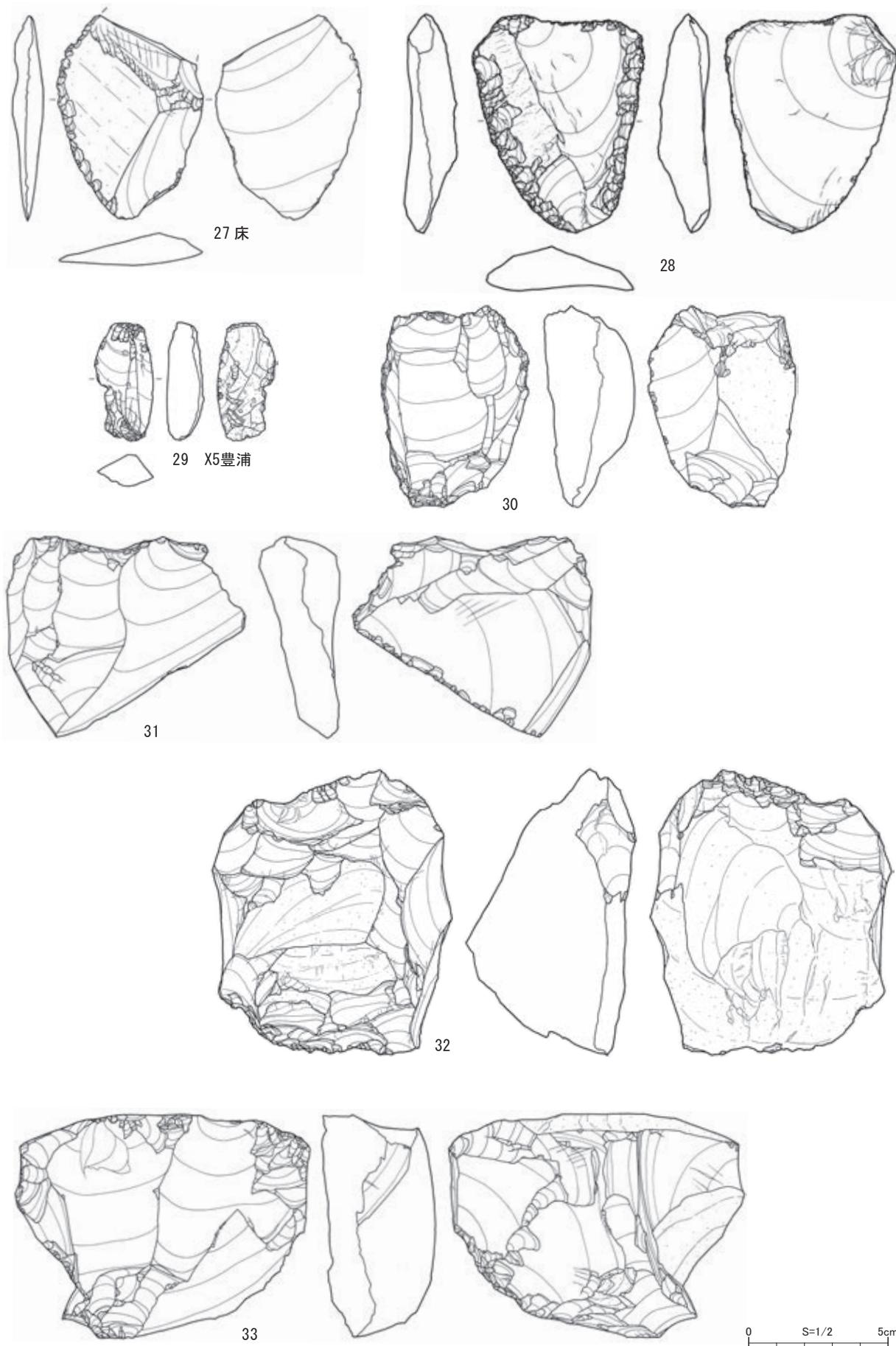
石器：13 ~ 14 は I a 類の石鏃。15 ~ 17 は石槍。15 は茎部末端につまみ状の突起のある石槍の基部破片。16 は最大幅が先端側にある。17 は断面 V 字型の両面調整体で、直線的な左側縁は長軸方向の擦痕を伴う摩滅により丸くなり、石鋸として利用されたとみられる。18・19 は両面調整石器。18 は平坦剥離により円形に整形される。19 は泥岩の扁平槍円礫の正面全体に粗い剥離が行われ、鋸歯状である。20 は縦型のつまみ付きナイフ。21 ~ 28 はスクレイパー。21 ~ 23 は I b 類、24・25 は III 類、26 ~ 28 は VI 類。29 は楔形石器。小型の角礫を両極剥離によって分割したものとみられる。1 mm 大の球顆を含む黒曜石で、産地分析の結果、「豊浦」産と判定されている (K04-X5)。30 ~ 37 は石核。30 ~ 32 は I a 類、33・34 は I b 類、35・36 は II a 類、37 は VII 類である。30・33・34・37 には角礫面、36 には転礫面が残る。37 は交互剥離による数回の剥離で遺棄される。38a は擦り切り技法による切断時に破損した剥片の接合資料である。38a の腹面上下には擦り切りによる溝があるが、下の溝は一部のみである。38d の腹面上部の擦り切り溝に打点があり、タガネ状の石製道具を使って間接打撃により切断を試みたとみられる。38a の腹面右側には下部の溝がなく、上下の溝に沿って分割できなかつたようである。39 は石斧。全面研磨により整形され、擦り切り面は確認できない。40 は石のみ。両側縁と刃部が整形され、刃部には刃こぼれ状の剥離が両面に見られる。41 は扁平打製石器 IV 類。正面右側には下面に平坦面があるが、左側は下縁からの剥離で大きく剥落する。42a はすり石 II 類 (42b) と剥落した剥片 (42c) の接合資料。42a の下面には長軸方向の線状の溝が確認できる。42b の打面は線状で、42a の敲打によって剥落したものと考えられる。42b と 42c の間には隙間があり、42b 剥落後も使用され、その後、42c は中央で割れたとみられる。43 ~ 45 は石鋸。43・44 は石材の肉眼的特徴が類似し、同一母岩または同一産地で採取された可能性が高い。45 は軟質の素材で、部分的に打ち欠きによって整形される。46 ~ 48 はたたき石。46 は I a2 類、47 は I b 類、48 は II b 類。49 は砥石。



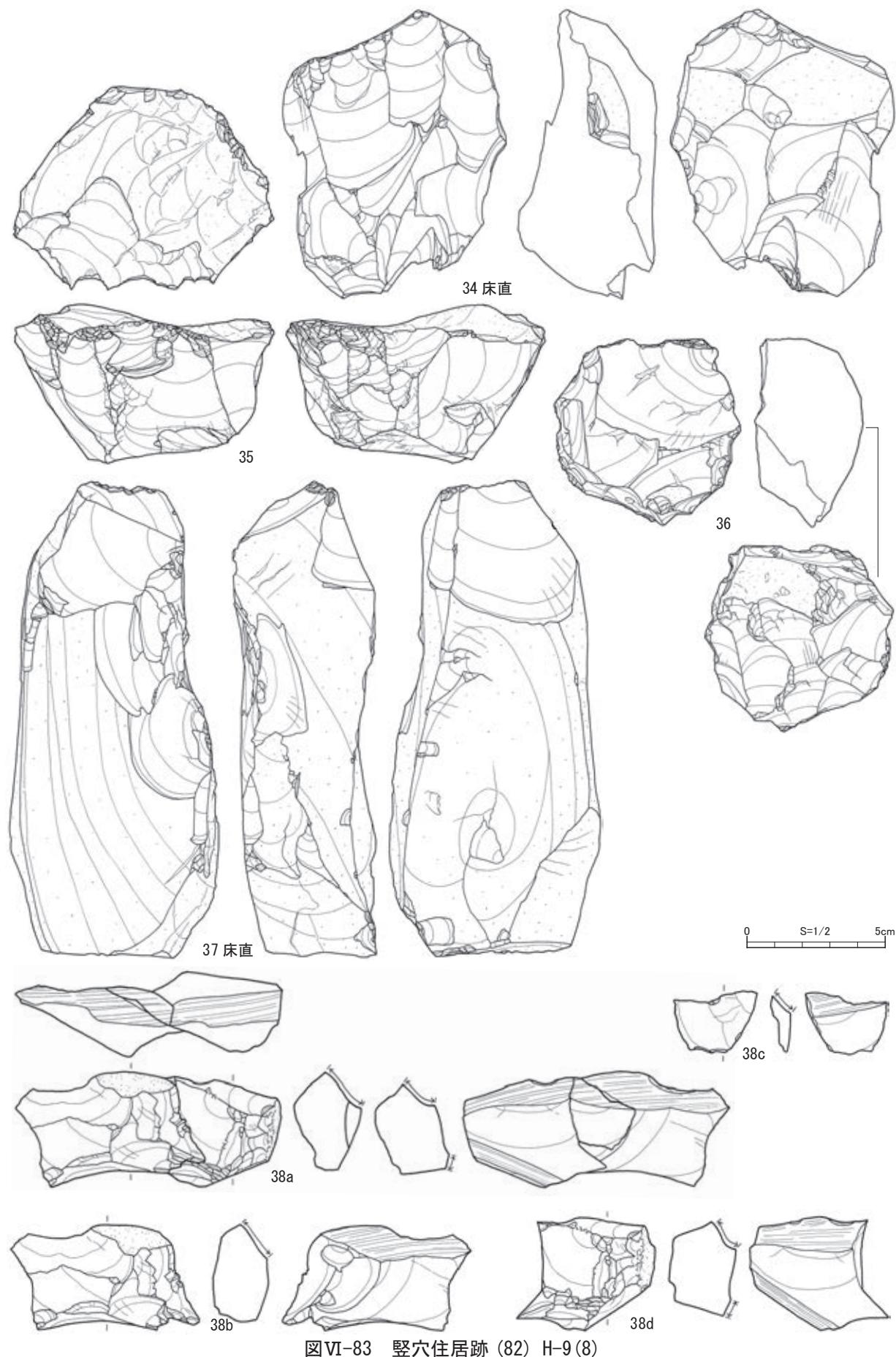
図VI-80 壁穴住居跡 (79) H-9 (5)



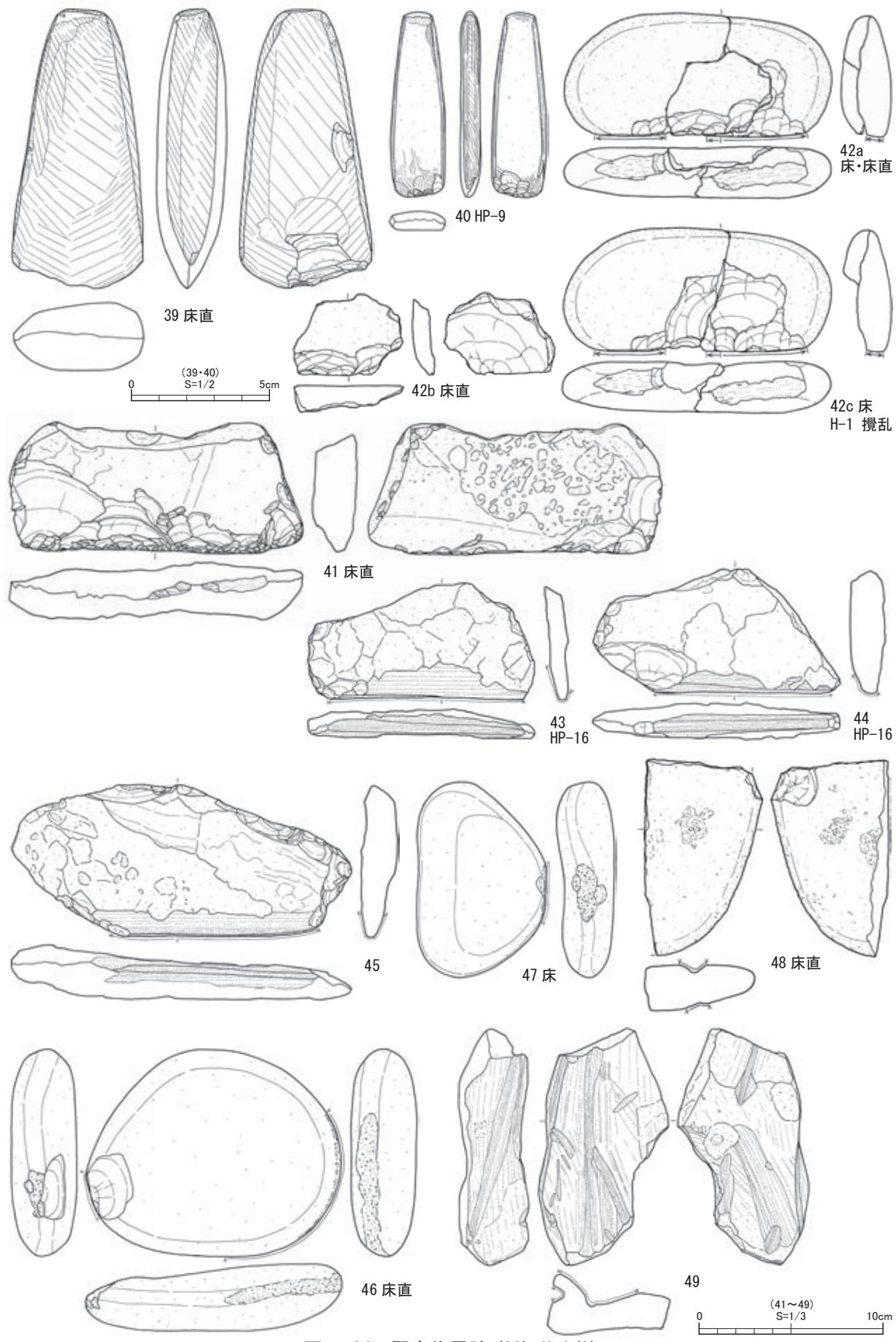
図VI-81 竪穴住居跡 (80) H-9 (6)



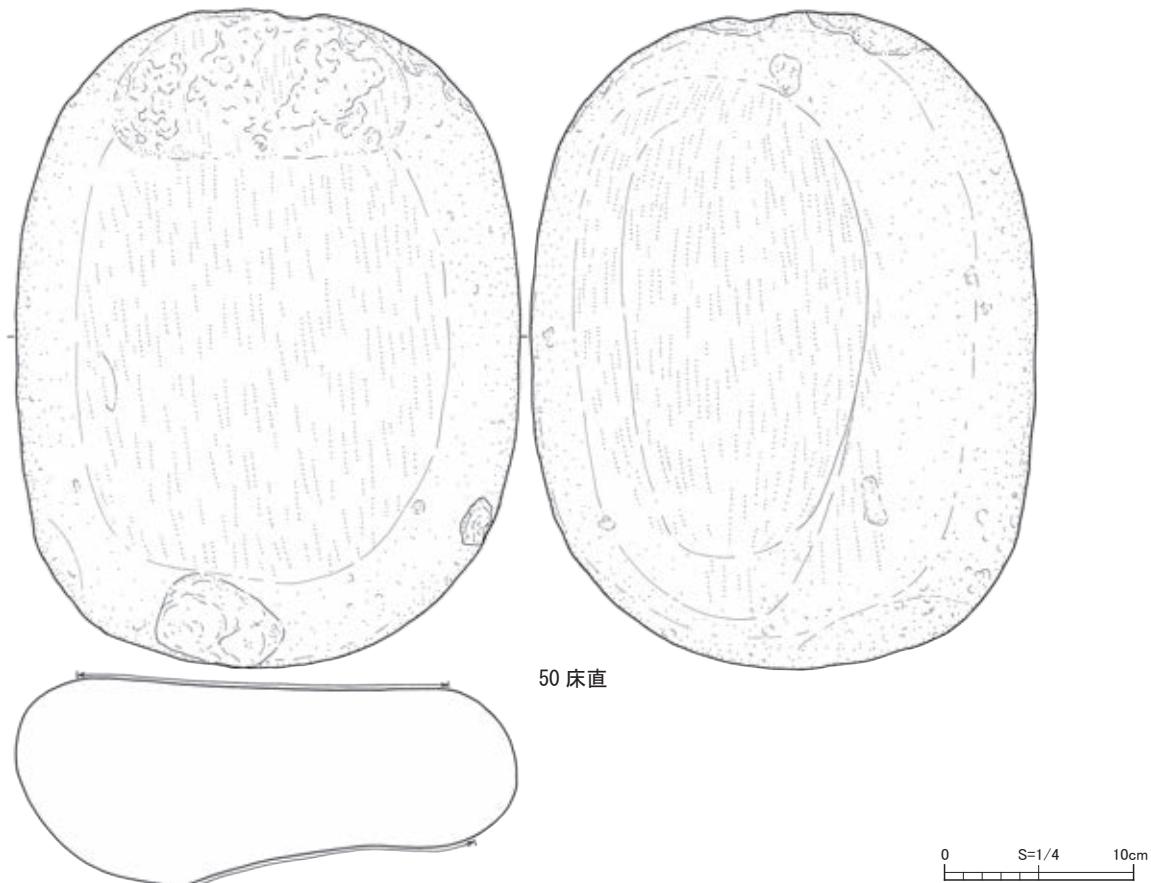
図VI-82 壱穴住居跡(81) H-9(7)



図VI-83 竪穴住居跡 (82) H-9 (8)



図VI-84 壇穴住居跡 (83) H-9 (9)



図VI-85 壇穴住居跡 (84) H-9(10)

一部折れ面を除き、U字状、溝状のすり面に覆われ、使い込まれている。50は石皿。正面は幅広で平坦な、裏面は相対的に幅の狭いくぼんだすり面がある。

51（母岩5・接合130）は接合資料。19.7×13.4×10.2cm。表面は砂の凝集した原石面で、角礫の状態で搬入されている。打面と作業面を入れ替えながら剥離が進行する（工程1～16）。節理面で二分割された後、個体A・Bは分割面を打面として周縁で短寸の剥片が剥離される。（鈴木）

壇穴住居跡10 (H-10) (図VI-87～89、表VI-2、図版64)

確認・調査：調査区西側の標高27.4m付近の高・低位・斜面部に位置する。Kライントレンチ調査の際に断面で検出され、周辺のIII層やRM層を掘り下げたところで汚れた褐色土の広がりを確認した。南北方向のベルトを設定し内部を掘り下げた。覆土中には小砂利がまとまって出土している。遺構の主体は南側の調査区外に伸びている。

土層：H-2に関連するRM層の下部に屋根土の崩落土とみられる褐色土（3層）が堆積する。床面中央には硬く締まった褐色土の貼り床層（4層）が検出されている。

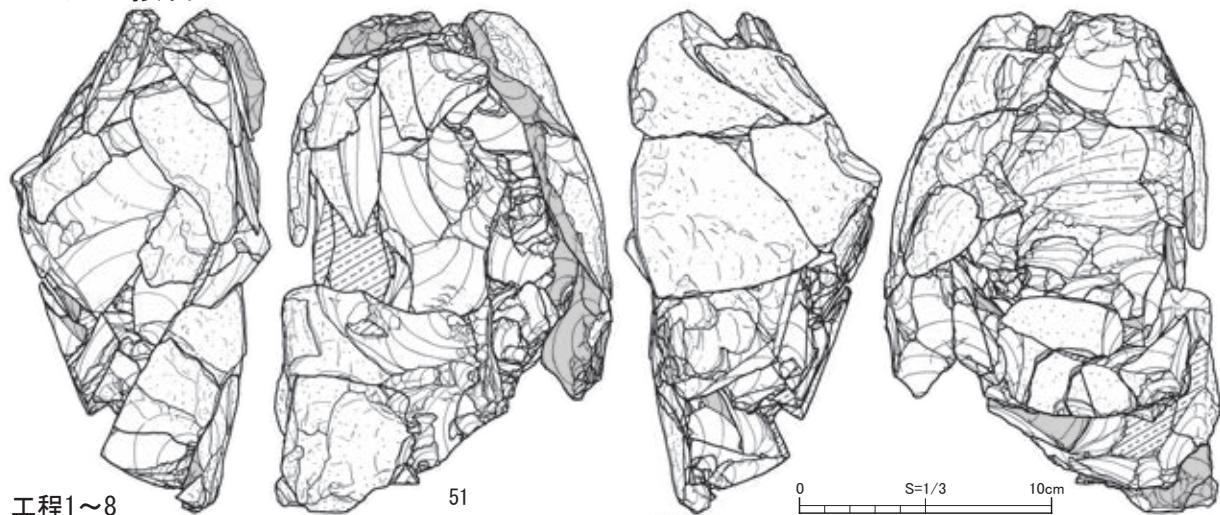
床面・壁：床は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。平面形は円～隅丸方形で、直径4～5mと推定される。

付属遺構：柱穴や炉跡は検出されていない。

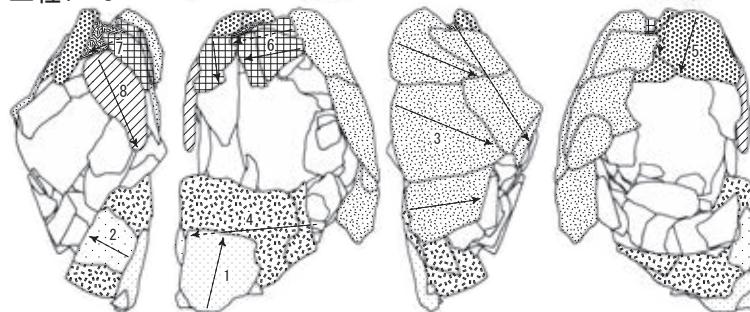
遺物出土状況：出土遺物の総数は925点で、土器等が2点、石器等が923点である。土器等はII群b類のみで2点が、石器等はつまみ付きナイフ1点、剥片434点、扁平打製石器3点、すり石3点、たたき石1点、台石1点、礫480点が出土した。

覆土中の小砂利は3cm以下の扁平な円礫で、460点（5mm以上の数えたもの）あり、ポンクレ川や河口で採取可能なものである。床面には扁平打製石器・すり石・たたき石・台石など礫石器が多く出

母岩5・接合130



工程1~8

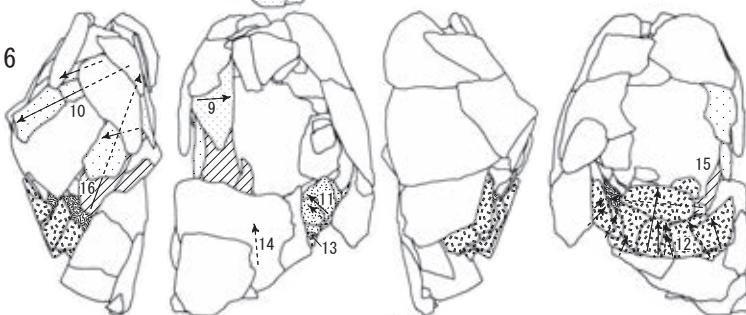


出土層位別点数

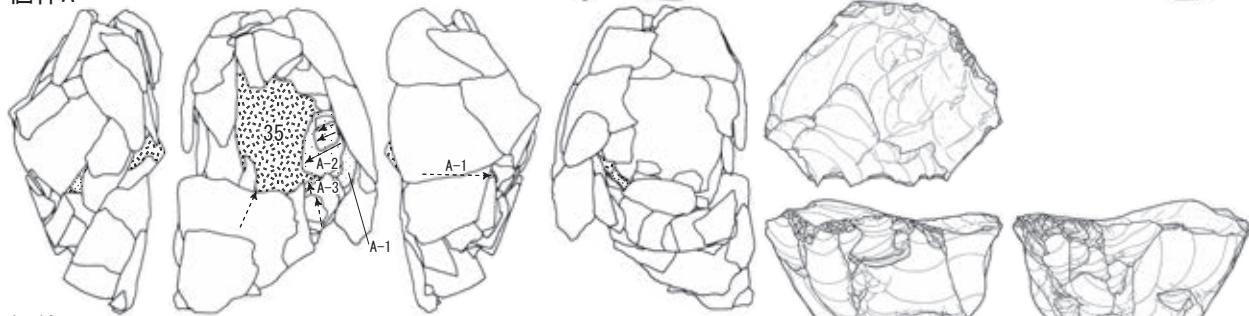
工程	1~16		計
	A A-1~3・石核	B B-1~3・石核	
床面直上	1		1
H-9 覆土1層	44	9(C1)	64
覆土2層	6		6
計	51	9	61

C:石核

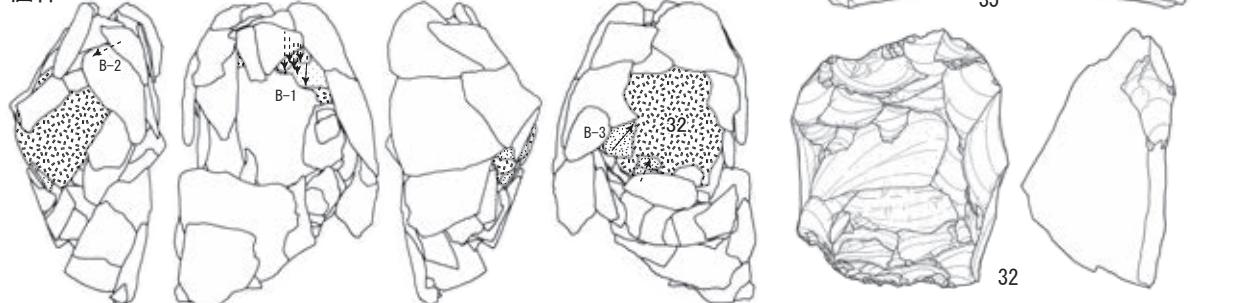
工程9~16



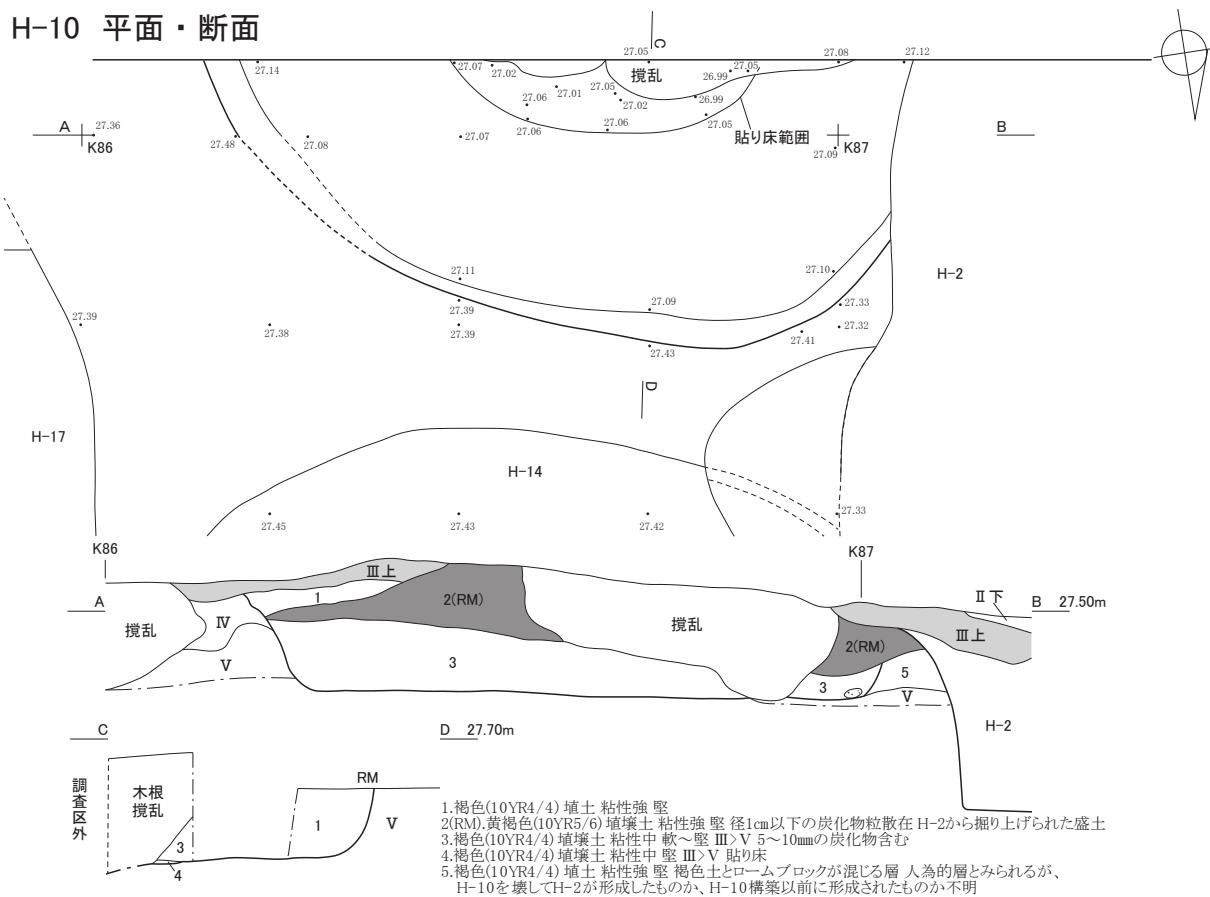
個体A



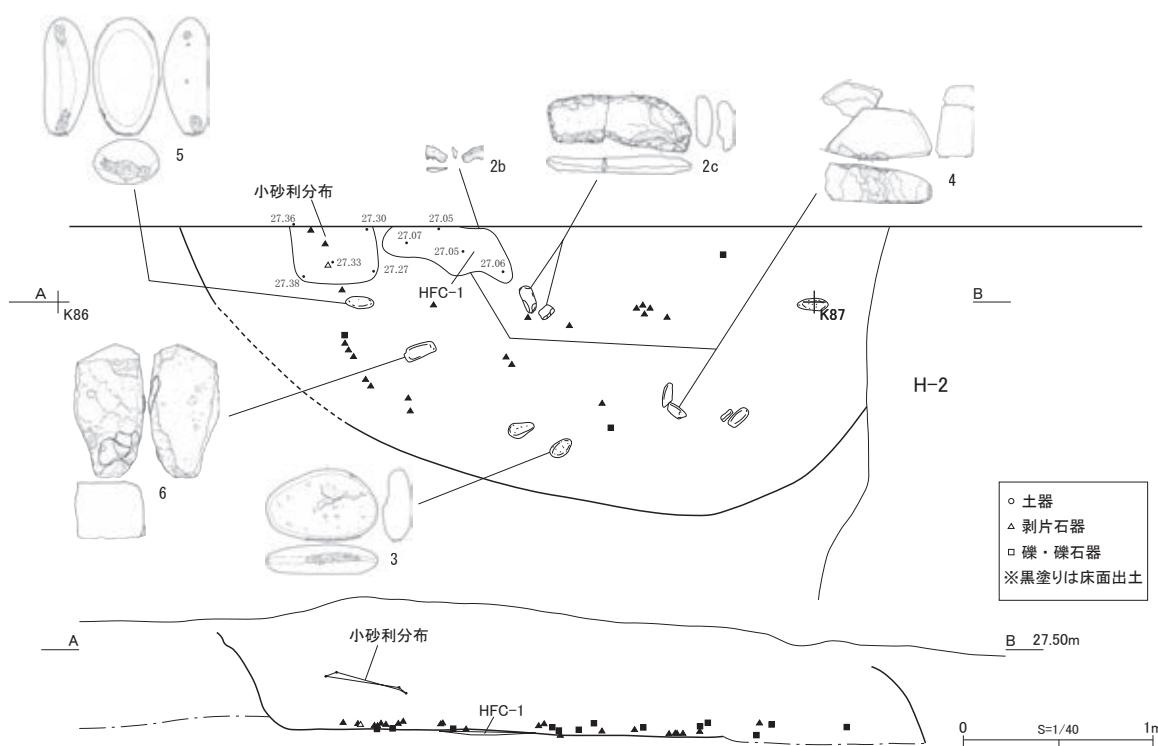
個体B



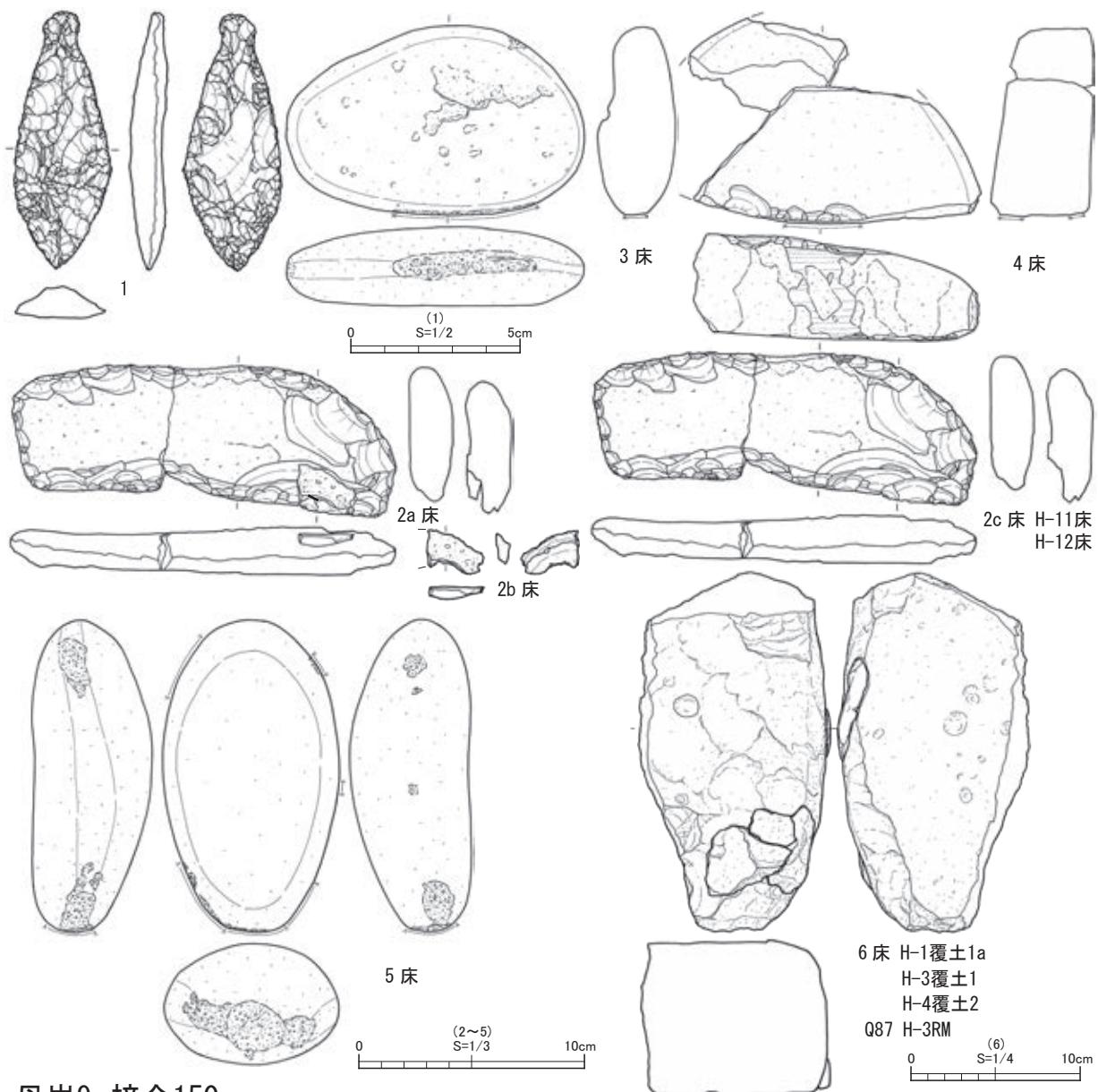
図VI-86 竪穴住居跡(85) H-9(11)



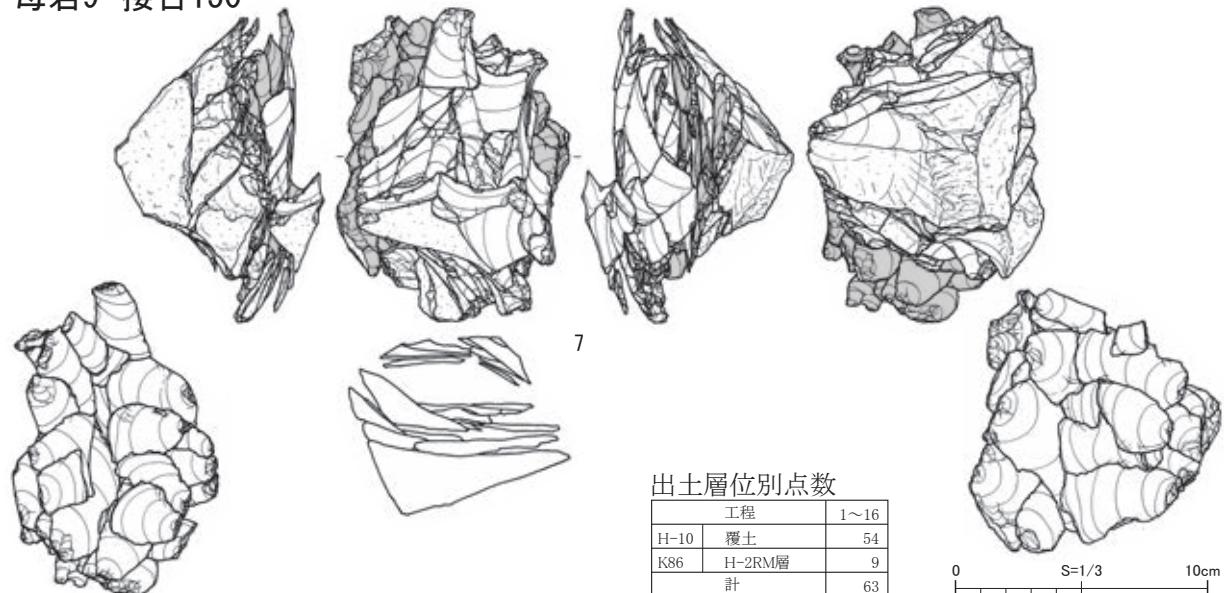
遺物分布



図VI-87 積穴住居跡(86) H-10(1)



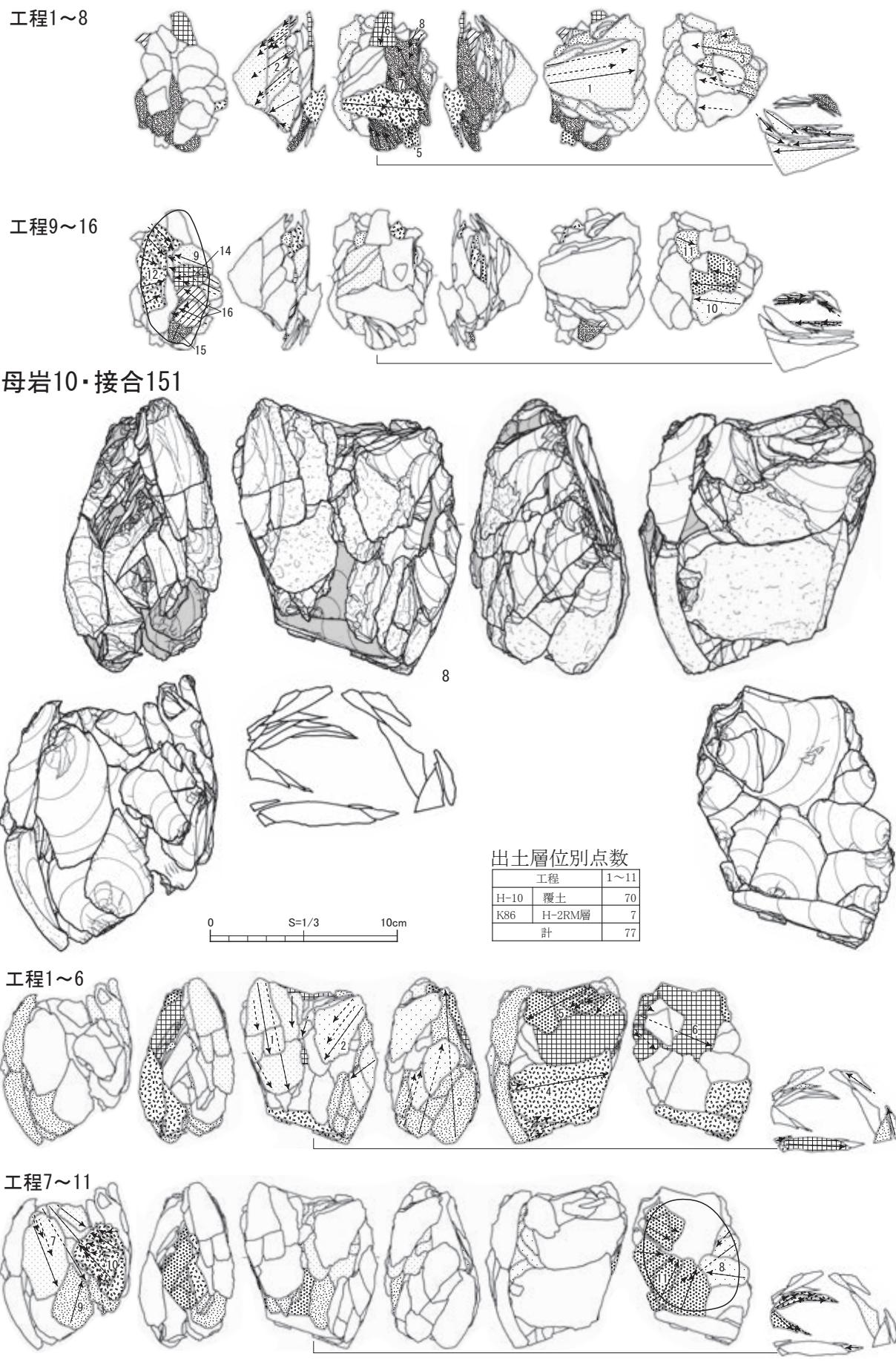
母岩9・接合150



出土層位別点数

工程	1~16
H-10	覆土
K86	H-2RM層
	計
	63

図VI-88 竪穴住居跡(87) H-10(2)



土している。

時期：出土遺物、RM層との層位的関係、住居構造から縄文時代前期後半円筒下層b1～c式期と考えられる。

掲載出土遺物：(図VI-88-1～図VI-89-8、図版191・192)

石器：1はつまみ付きナイフ。左右対称の石槍の先端部につまみが付いた形状である。2aは扁平打製石器IV類と剥片の接合資料。2bは下縁部で敲打した際に剥落したものであるが、本体である2cとの間に隙間があり、使用によりさらに剥落している。2cは中央左寄りで折損しているが、下縁は折損部で段差になっていることから、折損後、右側の大型破片が再利用されたと考えられる。3・4はすり石II類。3は右側に偏って平坦面がある。4は扁平な楕円礫を半割した素材で、レンガ割り技法により分割された可能性がある。下面中央の突出部のみ敲打により平坦化している。下部破片の折れ面角に、上部破片の欠損後につけられた敲打痕がある。5はたたき石Ic類。下端を中心として側縁複数か所に敲打痕がある。6は厚手の台石片。被熱による赤化が見られ、剥落した破片がH-1・3・4覆土、Q87区RM層など広範囲から出土している。

7・8は接合資料。7(母岩9・接合150)は12.3×9.2×8.3cm。平滑な面と砂の凝集した原礫面で覆われる小型の角礫を素材として原石で搬入される。裏面の左右からの剥離(工程1・2)で厚みを減少させ、正面では主に長軸方向の剥離(工程5～8)が行われる。その後、両面で主に左右短軸方向の平坦剥離(工程9～16)によって薄手で木葉形の両面調整体が製作される。正面長軸方向の縦長剥片は欠落し、石器の素材として利用された可能性がある。8(母岩10・接合151)は14.7×12.2×8.5cm。砂の凝集した曲面と一部平滑な原礫面に覆われたノジュール状の楕円礫素材で、数枚の粗い剥離面のある状態で搬入されている。当初上下方向(工程1・3)、正面右上から(工程2)縦長の剥片が剥離される。次に、短軸方向での剥離(工程4～6)が進行した後、多方向から求心状の剥離(工程7～11)が行われる。

(鈴木)

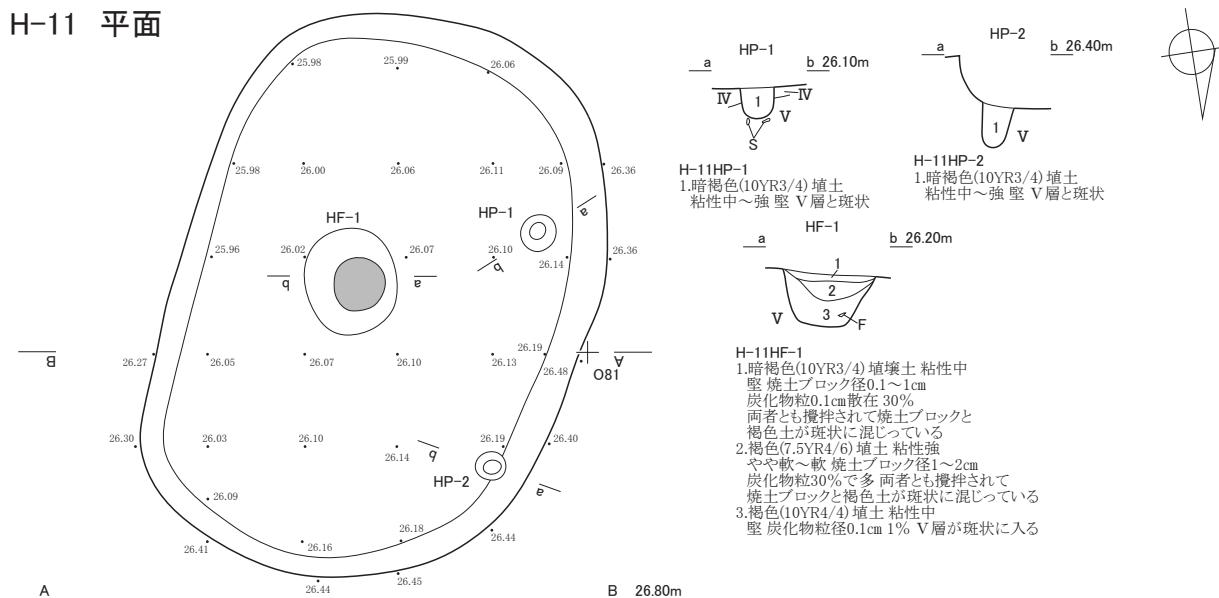
竪穴住居跡11(H-11) (図VI-90、表VI-2、図版65・66)

確認・調査：調査区中央部からやや西側の標高26m付近の斜面部に位置する。N・080区の包含層調査でM層にIII上層と暗褐色土が楕円形に落ち込む2.5mほどの範囲を検出した。遺構を想定し、0ラインに沿って土層観察用のベルトを設定し、トレンチ調査を先行して行った。結果、竪穴の掘り込みを確認したため土層を記録し、覆土の掘削を開始したところ、床面直上土の1層から床面にかけて大量の炭化材が検出された。焼失住居と判断し、炭化材を残しながら慎重に掘削を進め、炭化材の出土地点や形状などを記録した後、遺存状態の良い16か所からサンプルを採取した(図IV-90)。炭化材の配置に規則性などは見出せないが、丸木状のものが多くみられたことと出土層位から、炭化材の多くは住居構築材の可能性が高いと考えられる。床面と壁の検出では、地形低位となる南東方向が不明瞭であったが、炭化材範囲や床面の汚れ具合を基準にサブトレンチでの断面観察を加えながら確認を進めた。床面・壁の検出後、床面を精査し、付属遺構を確認した。竪穴形状は楕円形、大きさは長軸3.1×短軸2.2m、長軸は南西-北東方向に認められる。

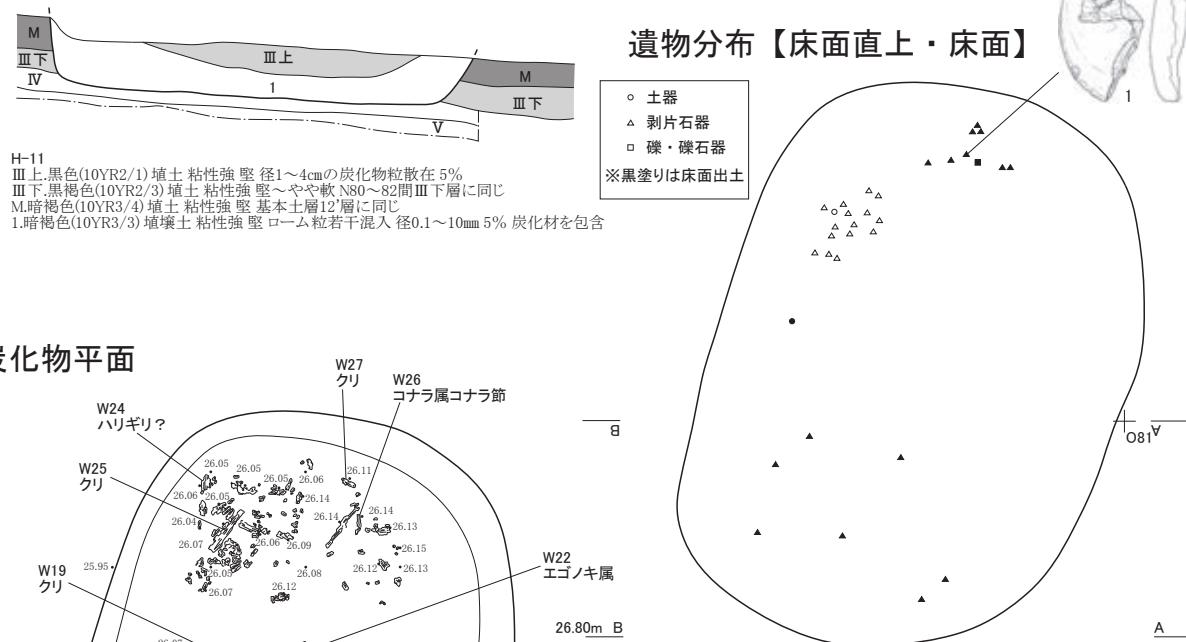
土層：土層は上部に自然堆積のIII上層、下部に屋根土の崩落とみられる1層が床面直上に堆積する。1層には大量の炭化材が含有される。また竪穴はM層を掘り込んで構築されている。土層の堆積過程は①住居の火災により屋根土の1層が崩落し、その過程で構築材も崩落し1層中に包含される、②竪穴の窪みにIII層が自然堆積する、の推移が考えられる。

床面・壁：床面は北西から南東側に向かって若干傾斜しており、北西壁と南東壁の付近を比較すると10cmほどの高低差がみられる。壁は北側で明瞭に確認され、急角度に立ち上がる。南側壁は不明

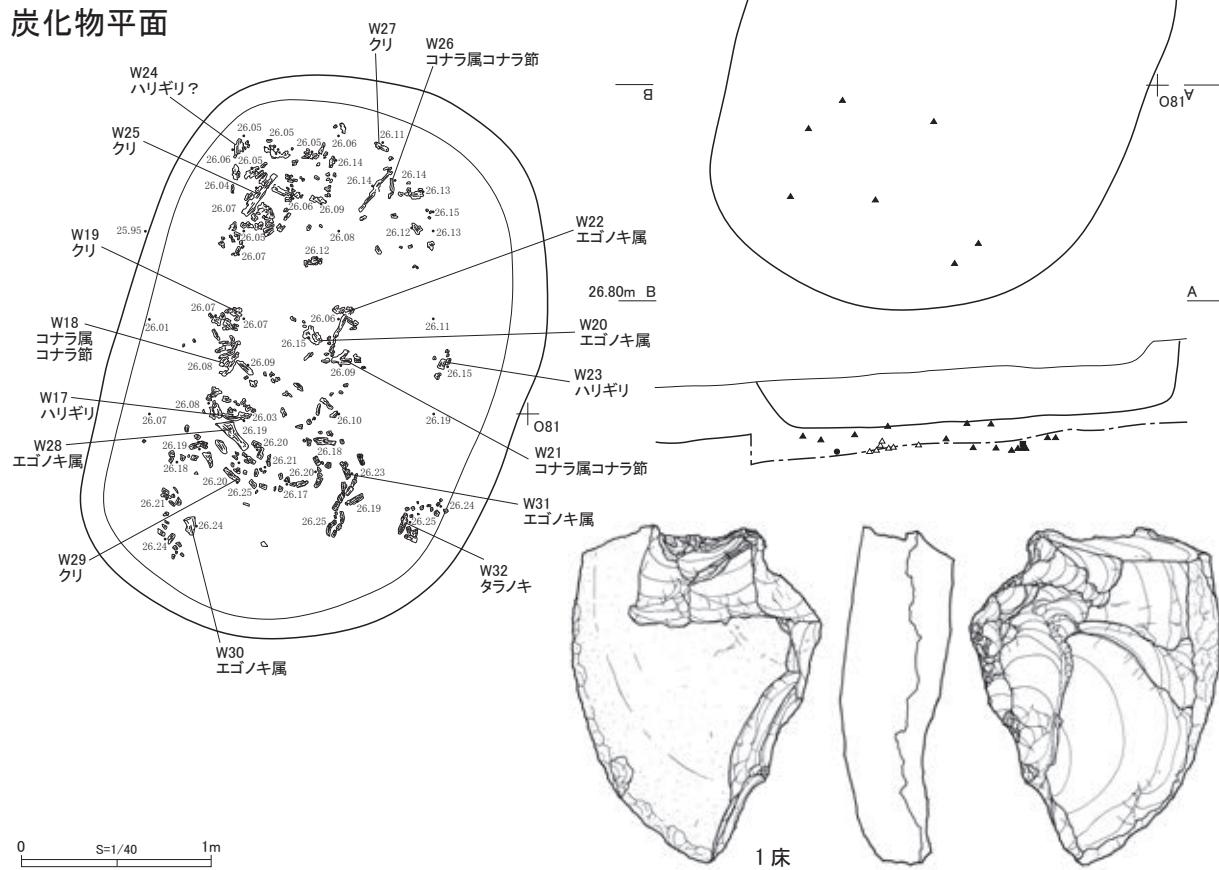
H-11 平面



遺物分布【床面直上・床面】



炭化物平面



図VI-90 墓穴住居跡(89) H-11

瞭であった。

付属遺構：付属遺構は柱穴と炉跡が確認された。炉跡はHF-1で竪穴中央部に位置する。炉の焼土は搔き回されたためかブロック状に認められ、その下位には長径55×深さ28cmの土坑が確認された。柱穴はHP-1・2の2基で、規模は径15～20cm・深さ15～20cm、位置は地形高位側の北西壁付近に1.1mほどの間隔で配置され、HP-2はやや内傾気味に構築されていた。

遺物出土状況：出土遺物の総数は230点で、土器等が20点、石器等が210点である。土器等はⅡ群b類のみで20点が、石器等は剥片206点、石核1点、原石1点、礫2点が出土した。

覆土出土の16点(KO4-W17～32)について樹種同定を行った結果、クリ4点、コナラ属コナラ節3点、エゴノキ属5点、タラノキ1点、ハリギリ2点、ハリギリ?1点であった。他の分析遺構(H-7・26・29)と樹種構成が大きく異なり、クリ以外の広葉樹の比率が高く、種類も多い。

時期：床面検出のHF-1出土の燃焼材とみられる炭化材からは $3,950 \pm 30$ yrBP(KO4-D16)、覆土出土の炭化材からは $3,960 \pm 30$ (KO4-D17)の年代測定値が得られている。遺物はⅡ群b類土器が出土しているが、年代測定値から縄文時代後期前葉天祐寺式期と考えられる。
(坂本)

掲載出土遺物：(図VI-90-1、図版192)

石器：1は石核VII類。扁平な楕円礫素材で、右側縁から両面に剥離が行われ、上部折損後も剥離が進行する。
(鈴木)

竪穴住居跡12(H-12) (図VI-91、表VI-2、図版67)

確認・調査：調査区中央部からやや北西側の標高25m付近の斜面部に位置する。N80区調査でV層中にⅢ層およびM層の落ち込みを確認したため遺構を想定したが、地形が傾斜する低位方向に盛土堆積が続き、遺構輪郭を示す落ち込み範囲を捉えることができなかった。そのため0ライン(C-D)と直交する任意のライン(A-B)に土層観察用ベルトを設定し、M層の掘削を進めた。M層下位のⅢ層まで掘り下げた段階で遺構覆土とみられる黒褐色土の範囲を検出したため、床面検出を目指して覆土の掘削を行った。床面とみられるやや硬化し黒褐色に汚れた面で炉跡を検出し、さらに壁の検出を試みたが、南側では部分的な確認に留まったため、明確に壁の平面形状を把握することはできなかった。そのため、遺構範囲は床面と認識した範囲を基準に作図を行った。竪穴住居の平面形は不整円形、大きさは長径3.5m×短径3.2m前後とみられる。

土層：竪穴住居はⅢ層を掘り込んで構築されている。覆土は1～3層に分層したがすべて壁の崩落もしくは流入土などの自然堆積とみられる。覆土上位にはM層が30cm以上堆積し、遺構を完全に覆っていた。

床面・壁：床面は北西から南東方向、地形高位から低位方向に傾斜している。また北壁付近で段状にせり上がっている。壁は北側で明瞭に確認され、急角度に立ち上がる。

付属遺構：付属遺構は炉跡と柱穴を1基ずつ確認した。炉跡はHF-1で竪穴中央部に位置し、大きさは0.8mで竪穴規模に対して大型である。柱穴はHP-1で北壁に近接する。規模は径20×深さ20cmでV字状の断面を呈する。

遺物出土状況：出土遺物の総数は171点で、土器等が9点、石器等が162点である。土器等はⅡ群b類のみで9点が、石器等は石槍1点、剥片156点、礫5点が出土した。遺物は覆土出土のみである。

時期：不明だが、覆土の遺物および覆土を覆うM層の堆積から縄文時代前期後半の可能性がある。

(坂本)

掲載出土遺物：(図VI-91-1、図版192)

石器：1は石槍。裏面の加工はやや粗く、器体は厚手である。

(鈴木)

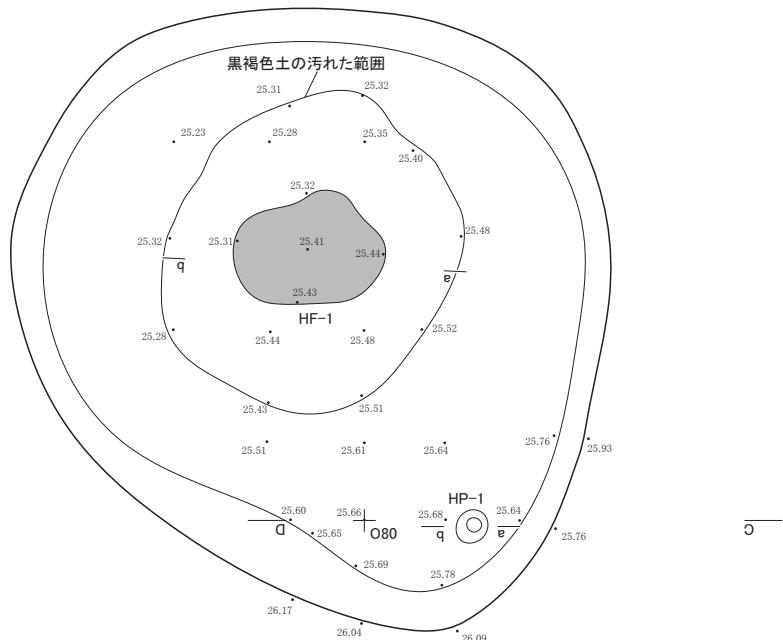
H-12 平面・断面

+N80



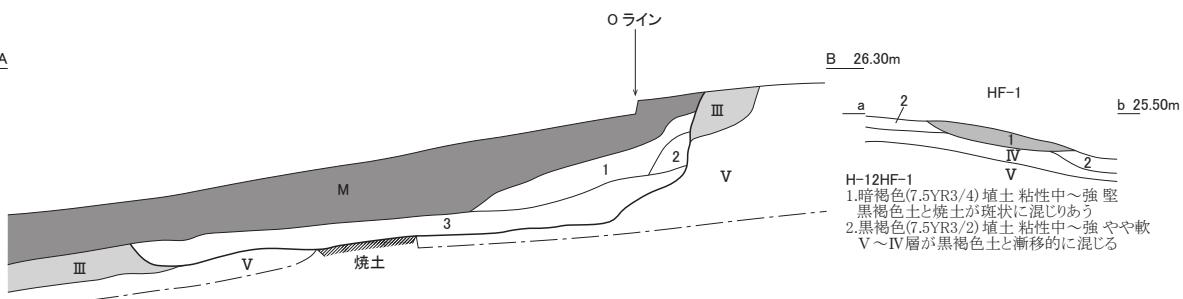
▲

黒褐色土の汚れた範囲



■

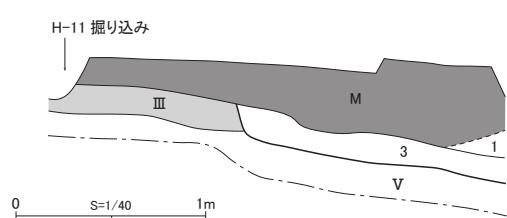
A



H-12

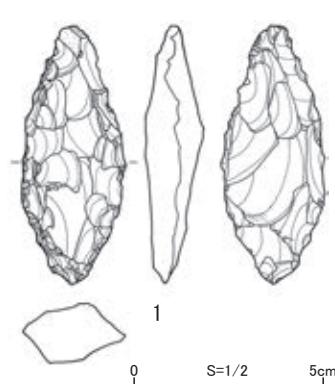
1. 暗褐色(10YR3/3) 壤土 粘性強 堅 褐色土中にロームブロック、ローム粒多 斑状に混じる
 2. にぶい黄褐色(10YR4/3) 壤土 粘性強 堅 褐色土中にロームブロック、焼土ブロック、炭化物粒(径1~2cm 1%)が混じる
 3. 黒褐色(10YR2/3) 壤土 粘性強 堅~やや軟 暗褐色土中にローム粒、ブロックが斑状に混じる
- III. 黒褐色(10YR2/3) 壤土 粘性強 堅~やや軟 暗褐色土中にローム粒、ブロックが斑状に混じる
- M. 暗褐色(10YR3/4) 壤土 粘性強 堅 炭化物、ローム粒(1mmくらい)が散在 ローム粒は7~10%

C



D 26.60m

HP-1 a b 25.80m

H-12HF-2
1. 暗褐色(10YR3/3) 壤土 粘性強 堅
黒褐色土とロームブロック、
ローム粒が斑状に混じりあう

図VI-91 竪穴住居跡(90) H-12

豊穴住居跡 13 (H-13) (図VI-92～106、表VI-2、図版 68～71)

確認・調査：調査区西側の標高 27.3m 付近の高位部に位置する。H-1・2・4 横断トレンチ調査時に断面で確認され、H-1 の周堤を掘り下げた段階で褐色土の広がりとして平面的に認識された。その中心に直交するように土層観察用のベルトを設定し、四分割して調査を行った。覆土中からは多くの一括土器が出土し、写真・図面等の記録と取り上げを繰り返しながら掘り下げた。

土層：覆土は大きく上・中・下に三分でき、上部には H-1 の周堤 (RM 層) とその下の褐色土 (1 層)、中部には自然堆積層の黒褐色土 (2 層)、下部には屋根土の崩落土とみられる褐色土 (3・5 層) が堆積し、床面中央に黒褐色土の貼り床層 (4 層)、壁際に三角堆積土の暗褐色土 (6 層) が分布する。自然堆積層 2 層の存在から住居の廃絶から RM 層の堆積まで時間があったと考えられる。

床面・壁：貼り床の上面は平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。平面形は隅丸方形で、北東部は H-1 に壊されている。

付属遺構：主柱穴 6 基 (HP-1～6)、やや浅い柱穴状ピット 1 基 (HP-7) があり、6 本柱の住居である。主柱穴は太さ 15～20 cm、深さ 30～40 cm で細く、浅い。HP-7 は深さ 20 cm で、それらに比べ深い。中心付近には貼り床下部から 2 か所、その周辺から 3 か所の窪みが検出された。床面に炉跡は検出されなかった。

遺物出土状況：出土遺物の総数は 18,549 点で、土器等が 8,960 点、石器等が 9,589 点である。土器等は II 群 b 類 8,923 点、時期不明 30 点、焼成粘土塊 7 点が、石器等は石鏃 6 点、石槍 2 点、両面調整石器 7 点、つまみ付きナイフ 4 点、スクレイパー 14 点、R フレイク 11 点、U フレイク 1 点、剥片 9,138 点、石核 13 点、石斧 2 点、扁平打製石器 20 点、すり石 4 点、たたき石 7 点、原石 2 点、加工痕のある礫 6 点、礫 349 点、垂飾 1 点、石製品 2 点が出土した。

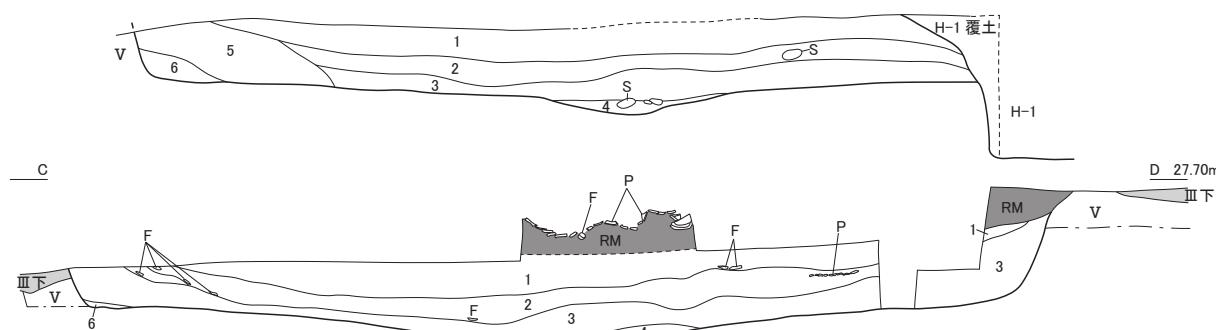
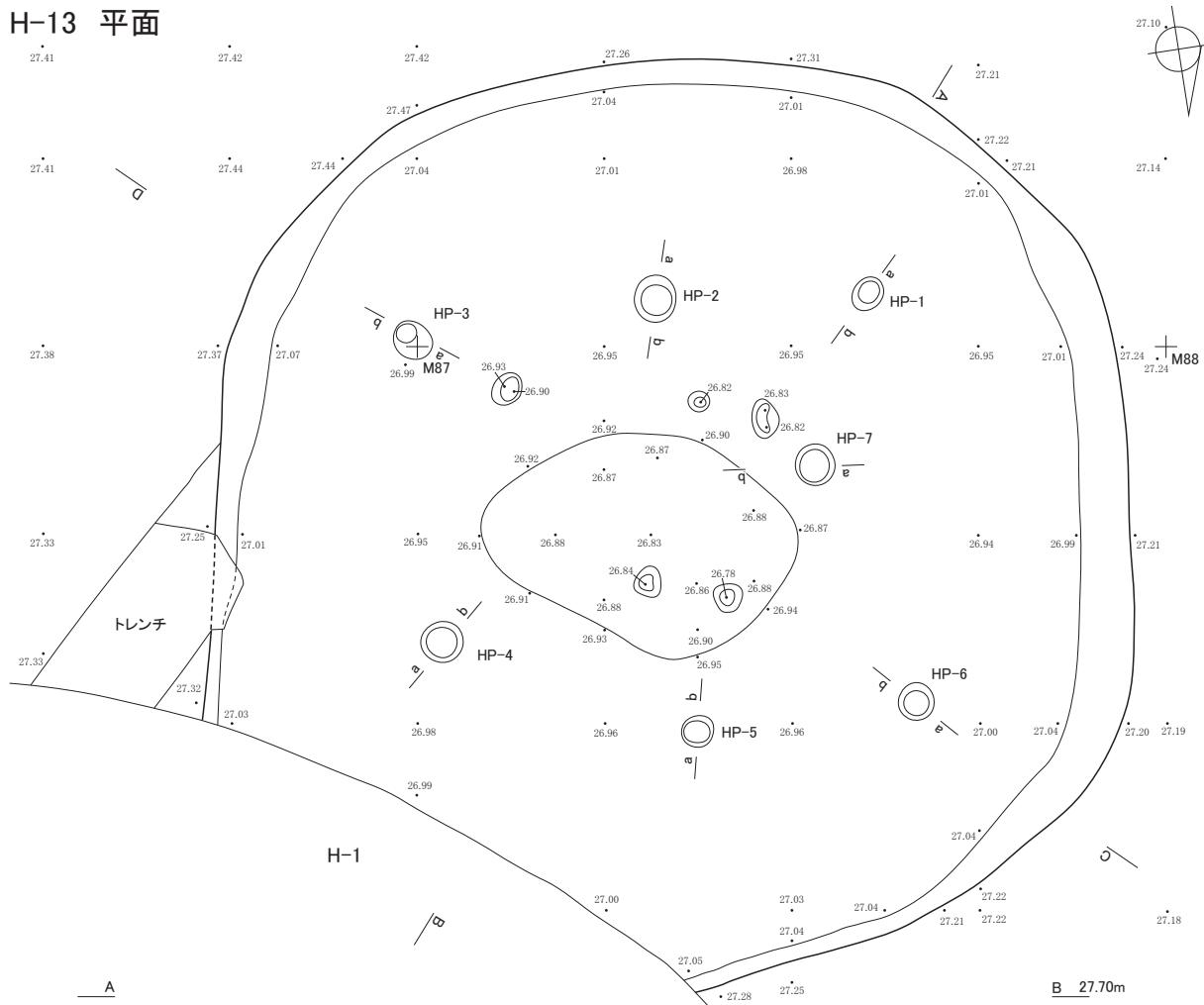
RM 層から覆土 2 にかけて多くの潰れた個体土器が出土し、床面からは頁岩剥片と扁平打製石器・すり石・たたき石などが出土した。図 VI-63-22a は剥片とすり石の接合資料であるが、剥片は H-13 の床面・覆土、すり石は H-7 覆土 1 出土で、H-13 で剥離された後、すり石が H-7 の覆土中に運ばれたものと考えられる。

時期：貼り床出土の炭化物からは 4,770 ± 30yrBP (K04-D18) の年代測定値が得られている。遺物・年代測定値から縄文時代前期後半円筒下層 b1～c 式期と考えられる。

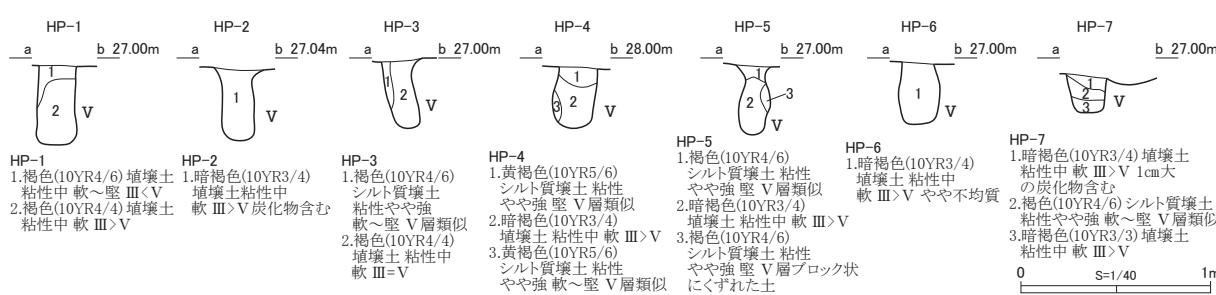
掲載出土遺物：(図 VI-96-1～図 VI-105-59、図版 193～199)

土器：1～33 は II 群 b 類。1～3・12・14・15・17 は口縁部下に隆帯のあるもの。1 は 4 か所の波状口縁で、口縁部に不整綾絡文、胴部に多軸絡条体が右下がりに施文され、部分的に単軸絡条体 5 類が上書きされる。隆帯上には刺突があり、内面は貝殻条痕による調整痕が残る。2 は口縁部に横方向の単軸絡条体 5 類が回転施文され、その上に 2 本 1 組の鋸歯状の沈線が描かれる。口縁部区画帶の隆帯下位には沈線が巡る。3 は口縁部に不整綾絡文と縦の区画文である 2 本 1 組の縄線があり、隆帯上とその上縁には地文原体である絡条体の側面圧痕が見られる。12 は厚手で、大型深鉢の破片。不整綾絡文と隆帯と沈線があり、地文は複節 RLR 斜行縄文。13 は 12 に近い厚手の破片で、複節縄文 RLR が施文される。14 は、口縁部付近は LR 斜行縄文に単軸絡条体 1 類が上書きされ、胴部は単軸絡条体 1 類 R が施文される。15・16 は口縁部に絡条体圧痕のあるもので、15 は無文地に横方向、16 は鋸歯状に押捺される。17 は貼り付け上下に不整綾絡文があり、口縁部には鋸歯状の縄線が上書きされる。3・4・17～22・24 は縄線文が施文されるもので、3・4・18 は縦の区画として、17 は鋸歯状文として、不整綾絡文や単軸絡条体 1 類に上書きされる。4 の口縁部文様区画帶は 2 本 1 組の沈線で、その間には刺突が施される。口縁部と胴部は同一原体の回転方向を変えているが、底部付近と底面には LR 斜行縄文が施文

H-13 平面

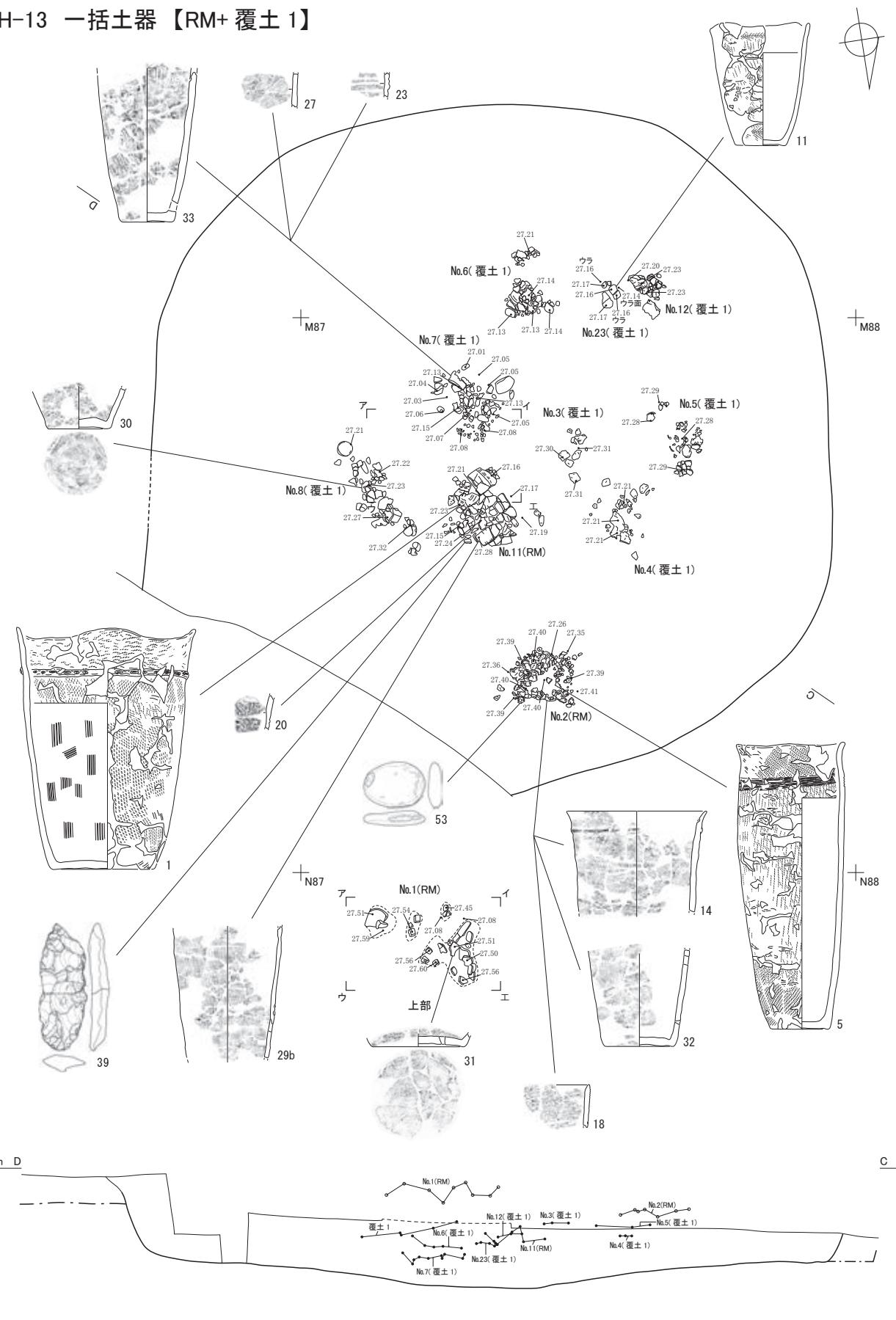


H-13
RM, 黄褐色(10YR5/6)シルト質壙土 粘性やや強 軟~堅 1cm大の炭化物、土器・石器含む V層類似
1.褐(10YR4/4)壙土 粘性やや強 軟~堅 1cm大の炭化物、土器・石器含む III-V
2.黒褐色(10YR2/2)壙土 粘性やや強 軟~堅 1cm大のV層粘土粒3%含む 土器多量に含む 腐植土
3.褐(10YR4/4)壙土 粘性やや強 軟~堅 1~2cm大のV層粘土粒10%含む 土器・石器少量含む
4.黒褐色(10YR2/2)壙土 粘性やや強 軟~堅 1cm大の炭化物含む
5.褐(10YR4/6)シルト質壙土 粘性やや強 軟~堅 III< V V層粘土粒2%含む
6.暗褐色(10YR3/4)壙土 粘性中 軟~堅 三角堆積土



図VI-92 穫穴住居跡(91) H-13(1)

H-13 一括土器【RM+ 覆土 1】

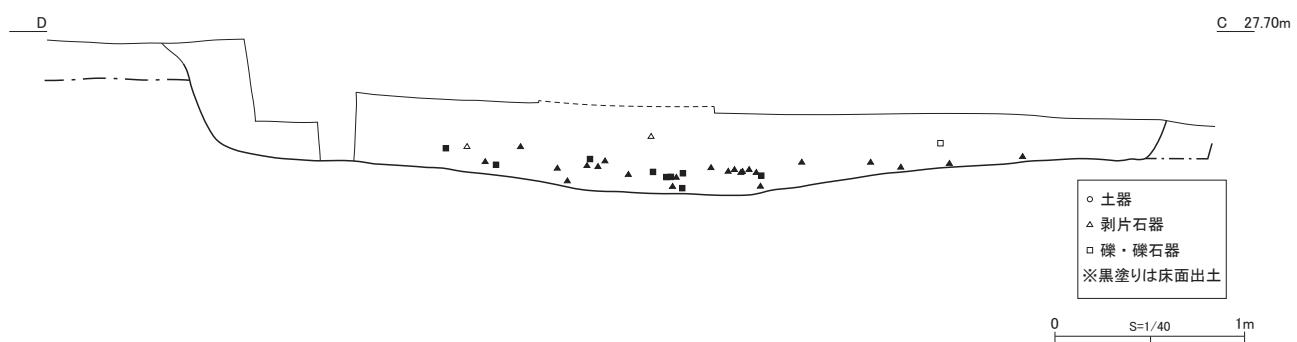
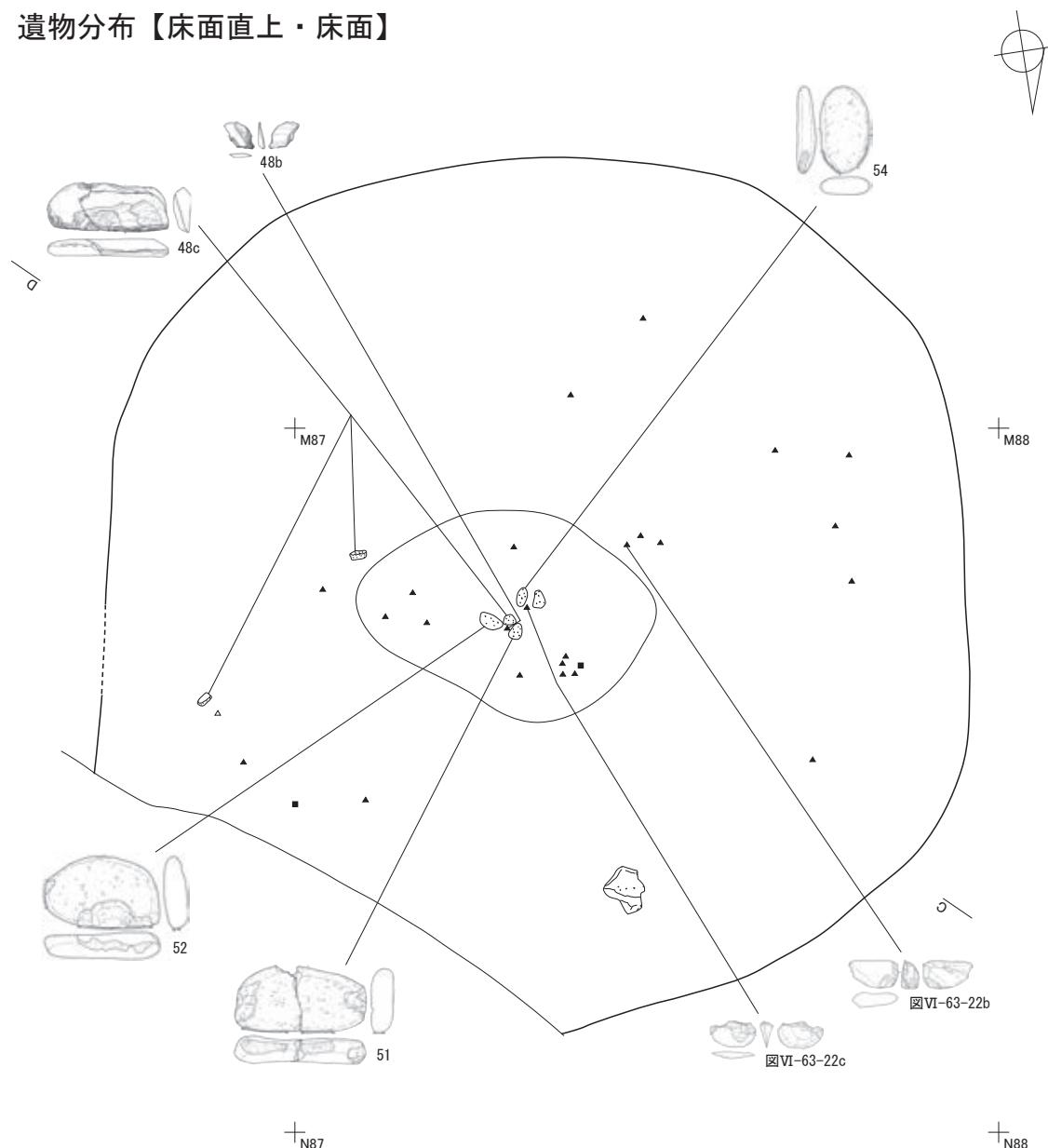


図VI-93 竪穴住居跡(92) H-13(2)

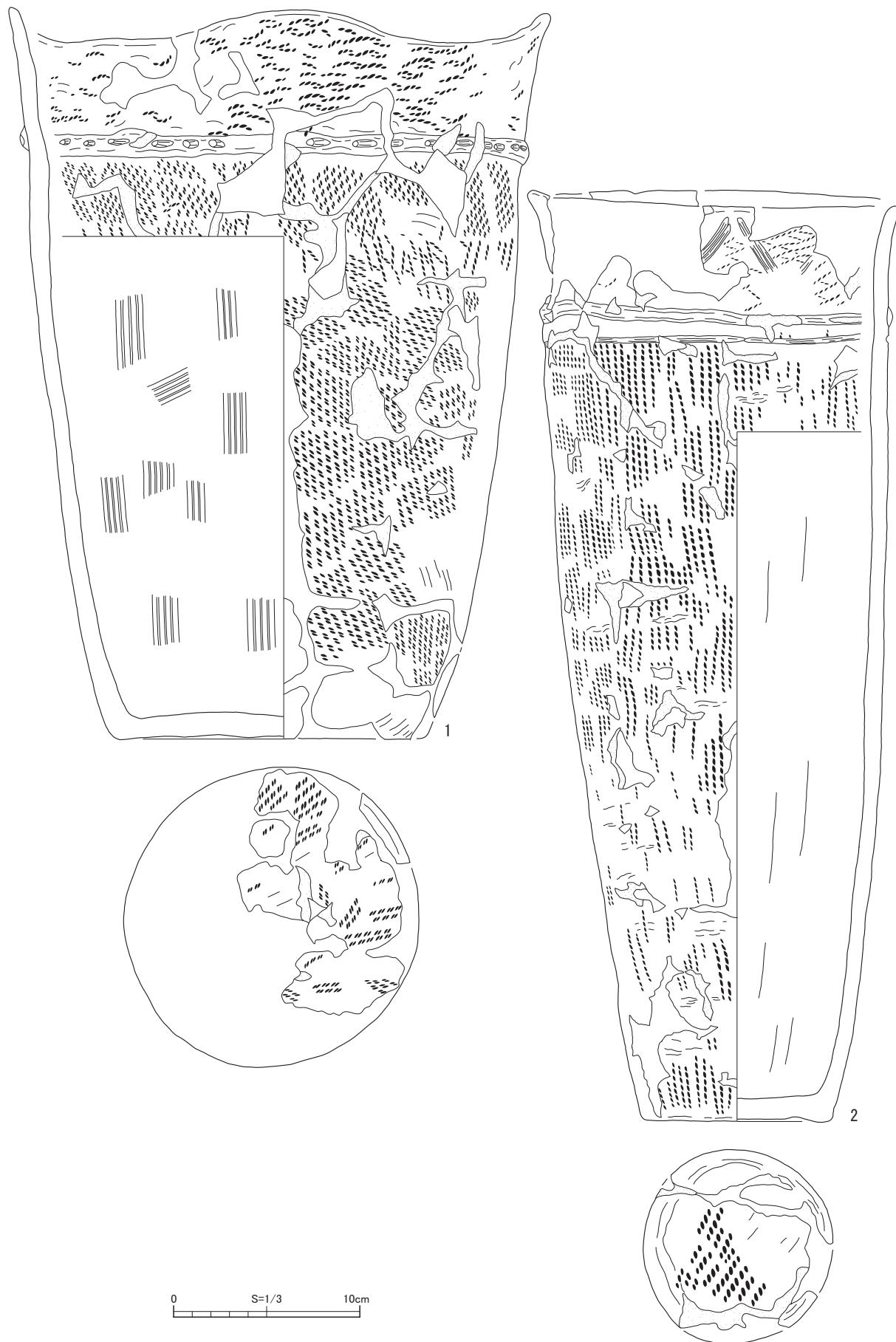
H-13 一括土器【覆土 2】



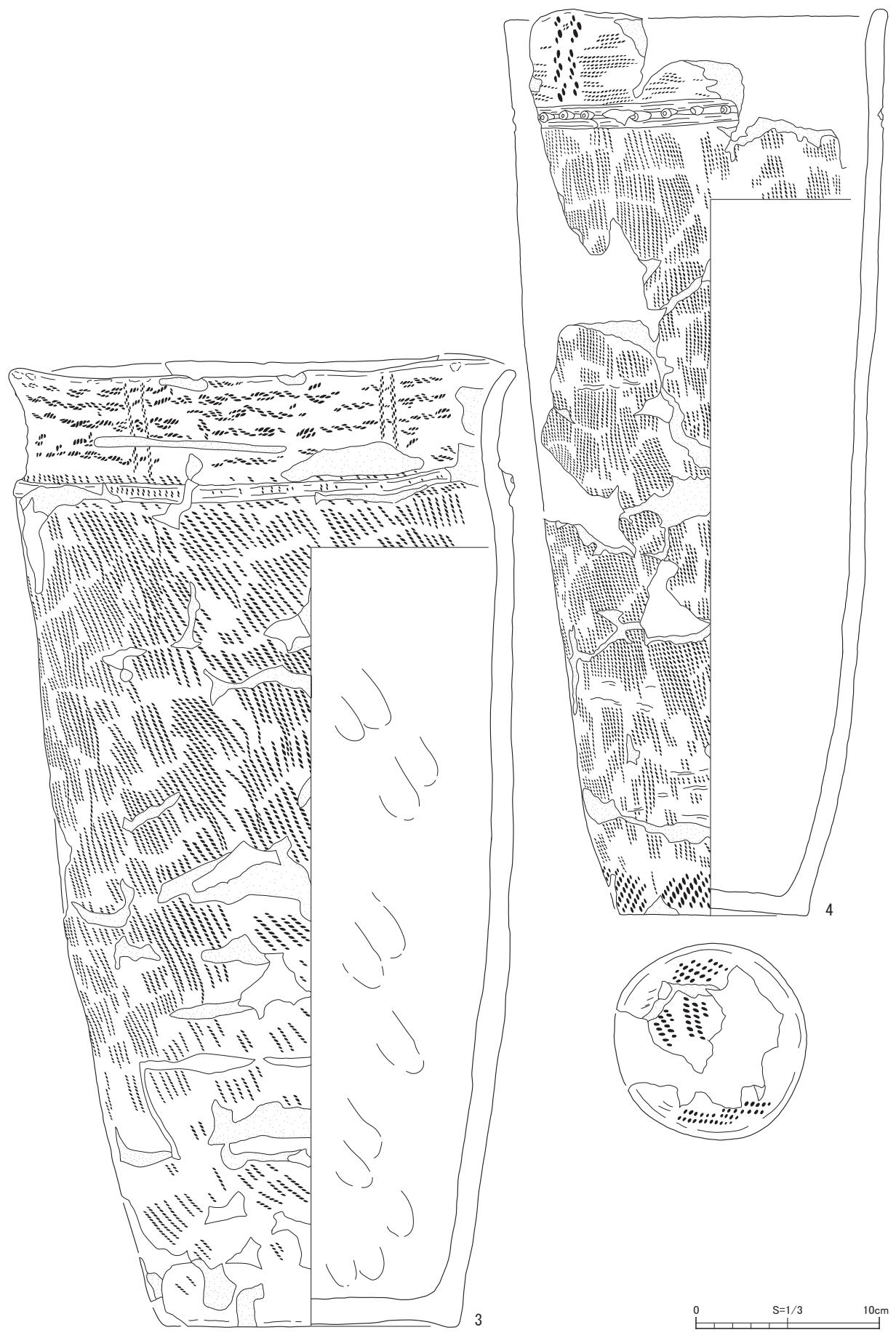
H-13 遺物分布【床面直上・床面】



図VI-95 竪穴住居跡 (94) H-13 (4)



図VI-96 積穴住居跡 (95) H-13(5)



図VI-97 竪穴住居跡 (96) H-13(6)



図VI-98 積穴住居跡 (97) H-13 (7)